雨が止むまで

シャール

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雨の日に出会った少女、楓（かえで）と一人暮らしの大学生、三枝雅紀（さえぐさま　まさき）の七日間の出来事

ちょっとした思い付きで作ったため終わりが微妙かもしれません。あとうぷ主の文章力は壊滅級のため「こんなん読んでられっか!!」というかたはブラウザバックしてください

それでもいいよという方はゆっくりしていってくださいね

※ガールズラブのタグを追加しました、該当する話の前には注意書きしようと思います

目次

一日目 1
二日目 9
三日目 17
四日目 26
五日目 37
六日目 50
七日目 68
ＯＶＡ　高槻　美祐の秘密の恋 83
雨のち雲り。翌快晴 101

一日目

「ハァ、雨が降るのは夜中からじゃなかったのかよ」
俺は今大学の敷地内のコンビニに来ている
理由はこの豪雨だ、天気予報では２３時以降と言っていたのだが今は１９時
天気予報も１００％ではないとはいえこれは流石に文句の一つも言いたくなる
愚痴っていても雨は止まないのでビニール傘を買って大学のキャンパスを後にする
「・・・・・そりゃいきなりこの雨ならみんなバスで帰ろうとするよ」
バス停には多くの人が集まっていた、いきなり降り始めたから傘を持ってない人が多かったのだろう。もしくは歩いて帰りたくないのか

――――――――――――――――――――十中八九後者だろうな

俺の家はバスで３０分ほどの場所にある、歩くなら1時間ほどかかるのだが
ここで待っていてもそれ以上待ちそうなのは一目瞭然、ならば
「しょうがない、歩いて帰るか」
俺はバス停を背に家へと歩き始めた

傘をさしているせいかいつもより歩くのが遅くなって、1時間ほど歩いたがまだ家までは少しある
心の中で突然の雨に文句を言いつつ歩いていくと。家の近くの神社への石段が見えてきた
やっとここまで来たかと思うと同時に石段の場所に何かあるように見える
――――――――――――――――――――あれは・・・・・人か？
少し近づいたところで確信を持つ
見たところ女の子のようだ、体育座りして膝に顔を埋めているため細かくは分からないが中学生ぐらいだろうか

黒髪を肩ぐらいまで伸ばしていて、白いワンピースを着ている
梅雨のまだ温度が上がりきってないこの時期、それにこの雨の中ではワンピースだけなのは流石に寒そうだ
それにこんな時間に女の子が一人でいるなんて不用心なことだが・・・・・
声をかける義理もない
そう思い声をかけることなく通り過ぎる
少し歩いてから振り返ってみるとあの子はまだあそこに座ったまま
――――――――――――なぜだろう、街灯に照らされたあの子がとても儚げに見える。放っておくとそのまま街灯の光に溶けて消えてしまいそうなほど
あの子をあのまま置いて行ってはいけないと俺の勘が告げてくる。俺の勘はこういう時無駄に当たるのだが・・・・・
俺は大きくため息をつくと進路を変える
来た道を引き返すと少女の前に立って傘を差し出しながら
「お前、大丈夫か？」
声をかけると少女はゆっくりと顔を上げこちらを見る
彼女の黒い瞳はこちらを見ているようで、何も写してはいないのではないかと思わせるほど黒々としていた
「こんな時間に一人で雨の中にいるなんて、迷子か？　それとも家出か？」
家出というフレーズのところで少女は曖昧に頷く
「なるほどな。でももう夜になるし、こんな時間に女の子が一人でいたら危ないだろ？　家まで送ってやるけど、案内できるか？」
だが少女は家という言葉を聞くとビクッと反応した後、怯えるように縮こまったあと震えだす
その反応を見た俺は先ほどの彼女の家出に対する曖昧な回答の意味にうっすらと当たりがつく
「・・・・・・家にいられない理由でもあるのか」
その問いに少女は弱々しく頷く。なるほど、どうやらこの子は家で

あまりいい待遇を受けてはいないようだ
　最悪のパターンだと虐待、なんてこともあり得るだろう。どうすべきか決めかねた俺は深く考えずに、思ったことをそのまま口に出していた
「――――――――――家に帰りたくないなら、俺の家に来るか」
　その言葉に彼女は驚いたようにこちらを見る
　正直俺も何故こんなことを言ったのか自分の行動が不思議だが、言ってしまったからには責任を持たねば
「あー、家には帰りたくないんだろ、俺もお前のことを今すぐ親のところに返そうとかは考えてないんだよ。でもだからといってお前をこんな雨の中置いてくことはさすがにできない。
　だから、雨が止むまで。
　その間だけでも俺の家に来ればいい。・・・・と思うんだが、どうだ？」
　彼女はこちらの目をじっと見てくる、まるで俺の心を読んでいるかのように
「・・・・・・・・・・わかった」
「――――――そうか、なら早いところ帰ろう。お前も体が冷えてるだろうしな」
　長い沈黙の後に少女は了承してくれた、内心ホッとしつつ立ち上がり手を差し出す
　彼女は差し出された俺の手を少しの間見つめていたが、手を掴み返してくれた
「よっ」
　掴んだ手は力を入れると折れてしまいそうなほど細く、か弱い印象を与えてきた
「手、離すなよ」
「・・・・・・・・・うん」
　俺は彼女の手を引いて家に向かって歩き出した

お互い無言のまま歩くこと15分、自宅のあるのアパートに着く
このアパートは2階建てで俺の部屋は2階、1階には知り合いの先輩も住んでいるがこの時間はいつもバイトだ。出くわすことはないだろう
ちなみにこの先輩はロリコンなので会わなくて心の底から良かったと思える
鍵を開け中に入る、少女を玄関に待たせ自分はバスタオルを取りに行く
タオルを渡してよく水気をとってから中に入るように言っておき風呂の準備をする
戻って来ると彼女は床に座っていた、目の前にはきちんと畳まれたバスタオル
「そんなとこ座ってないで、こっちの椅子使っていいぞ」
そう言って指差すが少女は動かない、
「あー、まあ、それでもいいならいいんだが。とりあえず風呂沸いたら先入っていいぞ」
少女はまたこくこくと頷くとそれっきり黙ってしまう

しばらくの気まずい沈黙を破ったのは俺だった
「なあ、今更だけどお前名前なんて言うんだ？」
『雨が止むまで』な短い関係といえど名前を知らないと困ることも多い
「・・・・・・・・・・・・・楓」
「楓か、いい名前だな。苗字はなんていうんだ？」
その問いに楓はあまり答えたくなさそうな顔をしてこっちを見ている
「あーうん、あんまり詮索すんのは良くなかったな。悪かったよ」
そう返すと楓は
「・・・・・・・・・別に・・・・・・・・・気にしてないから」

やや突き放すような返しをしてくる
――――――――まあそりゃ警戒もするよな
「あっ、俺の自己紹介がまだだったな。俺の名前は　三枝　雅紀　だ、よろしくな楓」
そう言いつつ握手のために手を差し出す
「・・・・・・・・・・」
が、返してはくれないようだ。いきなり呼び捨てはまずかっただろうか？
そもそもこの場面でよろしくと言うのもおかしい気もしてきた
そんな益体も無いことを考えていると風呂が沸いたことを知らせる電子音が響く
「おっ、沸いたみたいだな。ほら風邪引く前にさっさと入ってこいよ、服とかは洗っちまうから俺の服でも代わりに着てくれ、置いとくから」
「・・・・・・・・・・わかった」
それだけいうと楓は脱衣所に入っていく
てっきり嫌な顔をされると思っていたが存外そんなことは気にしないようだ
――――――――楓の感覚は少々危ない気がする
そんなこと思いつつ風呂に入ったのを確認したのち脱衣所に入って服を洗濯機にかける
下着は見ないようにしたがワンピースはいいだろうと思い視線を戻すと
うっすらと血の跡があった
血というのは時間が経つと変色してこびりつき洗濯してもなかなか落ちなくなる
この血もその例に漏れず茶褐色になって服に染み付いている
――――――――虐待、という可能性が俺の中で高くなり複雑な気分になっていると
ガチャ　　と扉の開く音がする
驚いて振り向くとそこには風呂上がりの楓が立っている

もちろん彼女は風呂に入っていたのだから何か着ているわけもなく
「うおっ！わ、悪い！すぐに出るからちょっと待っ――――――――――」
「・・・・・・・・・・別に、気にしないから」
そう言うと彼女は本当に俺のことなど気にせず横のタオルを手にとって体を拭きだす
一瞬しか見てなかったからよくわからなかったが全身の、しかも普段は服に隠れているような場所に痣が多かった気がする
――――――――――やはり虐待を受けていたのか
薄々感づいていたが実際にそうだとわかると複雑な気持ちが渦巻く

「夕飯、カップ麺でもいいか？」
「・・・・・・・・・うん」
楓は常に無表情なためイマイチ感情がつかめない、多少なりとも表情筋が動けばわかるのだが・・・・・
3分待ってればいい出来てしまう時代に感謝しつつ2人で食べる
相変わらず楓は無表情のままカップ麺を食べている
――――――――――昔はもっと笑う子だったのだろうか
・・・・・・・こういう詮索はやめたほうがいいな
早々に食べ終えると容器をゴミ箱に突っ込む
カップ麺を2人で食べたあと今度は俺が風呂に入る、風呂から上がってくると楓の姿がない
どこに行ったのかと目を走らせると部屋の隅っこで小さくなっている楓を見つける
「あー、別にそんな隅っこにいないでもっとくつろいでていいんだぞ？」
「・・・・・・・・・・居させてもらってるのに、そんなことできない」
それっきり膝に顔を埋めて黙ってしまう

困ったものだ、そう思いつつも強引に動かすわけにもいかないので明日の支度を済ませる
天気予報によるとここから一週間ほどは雨が止まないらしい
梅雨は過ぎて今は夏だというのにここまで長引くとは珍しい、のだが
約束では『雨が止むまで』
――――――――まさか、一週間も置いておくわけない。頃合いを見て返すさ
そう思う俺と
――――――――一週間、匿ってやるぐらいならいいじゃないか
真逆の考えの俺がいる
俺は、どちらに従うべきなのだろう。

そうこうしていると時刻はもう２３時になっていた
明日は１コマ目から授業だ、そろそろ寝ないと遅刻しかねない。そう思い予備の布団を出し
敷き終えてから楓に声をかける
「俺はこっちの布団で寝るから、お前はあっちのベットで寝ろよ」
反応はない、ひょっとして寝てしまったのだろうか？
「おい、そんなとこで寝ると体に良くないぞ」
肩をゆすりながら声をかけると
「・・・・・・・・・・もう慣れたから、このままで大丈夫」
という返事が返ってくる、寝てはいなかったようだが――――――――

「お前、慣れたって・・・・・いつも床で寝てるのか？」
返事はないが聞くまでもないだろう、もはや彼女の親への怒りよりも楓に対しての哀れみの感情のが強くなっている

決めた、せめて俺の家にいるときくらいは、その間だけは彼女に苦しい思いをさせない生活をさせてやろう
そう決めた俺は無言のまま彼女を抱き上げるとベットまで連れて

行く
見た目どうり重さを感じないほど軽い楓を持ち運ぶのは難しくない
目を丸くしてこちらを見る楓をベットの上に座らせてから肩を掴んで強引に寝かせる
乱暴されると思ったのかギュッと目を固く閉じ肩に力を入れる楓を見て悲しい気持ちになりながら毛布をかけてやる
そのまま横に座って頭を撫でてやると恐る恐る目を開いてこちらを見てくる
「何も・・・・・・・・しないの？」
「アホ、お前みたいな女の子に手ぇあげるやつは男じゃねぇよ。お前の家ではどうだったかなんて知らねぇけど、ここではなにも心配しないで寝てろ。朝起きて床で寝てたらそれこそ怒るからな？」
「・・・・・・・わかった」
そういうと彼女は布団に潜り込む
心なしか顔が穏やかだったのは俺の見間違いだろうか
しばらくすると静かな寝息が聞こえてきたので俺も電気を消して布団に入る
「――――――――――これから短い間だけど、よろしくな楓」
言ってから寝ている相手に何を言ってるんだと思い恥ずかしくなって布団を頭からかぶる
布団に包まれれば自然と眠気がやってくる、俺はそれに抗うことなく意識を手放した

二日目

スマホのいつも通り騒がしいアラーム音で目を覚ます
時刻は朝7時半、全国の大学生が怠惰に過ごしているとすればそれなりに早起きな方だろう
外からはまだそれなりに大きな雨音がしている、それに風が窓をガタガタと揺らす音も
眠気を押し切りのそのそと布団から出てきてベットを確認する
楓はまだ眠っているようだ、こちらに背を向けたまま寝息を立てている
これで床の上で寝ていたらどうしようかと昨日は心配していたが杞憂だったようだ

俺はキッチンに行って起きる時間には炊きあがるように設定しておいた米を茶碗によそう
朝からおかずを作るのも面倒なので納豆のパックを開けて一緒に食べるだけで済ませる
昔は作ってくれる人がいて、その人がいなくなってからも少しの間は作っていたが
次第に面倒になっていき今ではきちんと作るのは夕食ぐらい
その夕食も昨日のように雑に済ませる日が最近は多いのだが・・・・
朝食を食べ終えると昨日のうちに準備していたものをまとめ身支度を済ませる

家を出る時間になり寝室の楓を確認するとまだぐっすりと眠っている
「・・・・・書き置きぐらいしといた方がいいか」
ルーズリーフを一枚取り出し大学に行くこと、炊飯器の中の米や冷蔵庫の中のものを好きに食べていい旨をササっと書き終えると家を後にする

バスは雨のせいで混んでいたが乗れないほどではなかった、やはりこの雨の中では普段歩きのやつもバスを使いたくなるらしい
そのまま３０分ほどバスに揺られ大学に着く
余裕を持って出たため講義の時間まで余裕がある
この大学はレベルで言えば中堅の最上位層でそれなりに人も多い、そのため大学の敷地もかなり広く時間を潰すための施設もチラホラとある
それらで講義までの時間を潰そうか考えていると後ろから聞き覚えのある声で呼ばれた
「センパ～イ、久しぶりですね～」
振り返るとピンクの傘が目に入る、そこからさらに視線を落とすと上目遣いでこちらを見ている女子がいる
「先輩とは講義の時間が被ってるせいであんまり会えなくて寂しかったんですよ～？もちろん先輩も私に会いたかったですよね？」
彼女の名前は　岡崎　麻衣
身長は小柄で１５０程度しかないらしい
服はおしゃれに気を使うらしく毎日違う服を着ている印象だ
まあ服なんて毎回意識して見てないからもしかすると被っているかもしれないが
彼女とは大学の友人に数合わせとして合コンに付き合わされた時に知り合ったのだが、俺を見つけるたびにこうして声をかけてくる
ただ話しかけてくるなら問題ないのだがいつもこうしてからかうようなことを口にしてくるため話してるだけで疲れる
そのため俺はあまりこいつのことが好きではないのだが向こうが絡んでくるため毎回仕方なく話している
「・・・・お前、誰にでもそんなことしてんのか？」
「まさか～先輩だけですよ♡」
「やめろウインクすんな寒気がする」
「流石にひどいですよ～私だって傷つくんですからね？こんな可愛い

乙女な私を傷つけた先輩は私のお願いをなんでも1つ聞くべきだと思うんですけど～」
「寝言は寝てから言ってくれ、あとお前のお願いとか怖すぎるから死んでもうけない」
　出会い方もそうだがいちいち絡んできて毎回こうなのだ、俺のことが気になっているのかと思い、もしそうなら断ろうと思い聞いてみたら
『え～？　私が先輩のことを好きなんじゃないかって？　アハハ、そんなわけないじゃないですか～先輩ってばおもしろ～い』
　若干目が泳いでいた気がしたが彼女がそうだというならばそうなんだろう
　・・・・・しかし、女心は難しすぎるな

　俺が昔のことを思い出していると麻衣は楽しそうに話し始める
「あっ！　先輩次の休日は空いてます？　よかったら私とお出かけしましょうよ～」
「たとえ空いていたとしてもお前と一緒に過ごす気はねぇよ」
「ひど～い、せっかく先輩と可愛い服買いに行って最初に見せてあげようと思ったのに～
　でも気が変わったらいつでも電話してくださいね♡」
「・・・・・・・・・」
「きゃ～先輩怒ってて怖～い」
　彼女の懲りないウインクに盛大な渋面を返してやると笑いながら小走りで去って行った

　ハァ　　大きく溜息を吐いてから腕時計を見ると講義まではあと15分ほどだった
　これなら移動する時間も考えればちょうどいい頃合いだろう
　結果的に時間を潰すという目的があいつで果たされたことが何とも言えない気持ちにさせる
　あいつが現れるときはいつも俺が手持ち無沙汰になった時だ、そし

て程よく時間が経つとあいつは帰っていく
ひょっとして俺のことを観察してるんじゃないか?そんな考えが頭をよぎったが寒気がして考えるのをやめる
あるわけがない、そう自分に言い聞かせつつ講義に向かった

「では本日はここまでにします、次回は――――――」
最初の一言とほぼ同時に多くのため息が響く
まだ前で話しているが最初の一言で完全に気が抜けた学生たちは聞いていない
かくいう俺もその一人なわけだがやめるつもりはない
一コマが長いが故の弊害だろう
今は昼頃、今日の大学での予定はもうないためさっさと帰ってもいいのだが・・・・・

食堂でカツ丼を頼んで端の方の席を取る、ちょうど講義の間ということもありかなり混んでいる
割り箸を手に取り食べようとしたら
「ここ、空いてますか~?」
誰が来たのかを見るまでもなく声で判断した俺は即座に追い払いにかかる
「残念だったな、そこの席はすでに先客がいるぞ」
「いないんですね~、じゃあ失礼しますよ~」
「話を聞け」
追い払うことにいつも通り失敗した俺は彼女との昼食が確定する
朝に会っただけでも疲れが溜まったのに昼食までこいつと一緒なんて
今日は厄日か

「今先輩失礼なこと考えてませんか～？」
「根拠のない言いがかりはやめろ」
　彼女はエスパーの持ち主なのだろうか、考えを読まれた
「先輩カツ丼好きなんですか～？」
「その日の気分で選んでるだけだ」
「つれないですね～、でも今日はどうして学食にいるんですか～？
いつも午前中しかない日は早く帰っちゃうのに」
「なんでお前が俺の予定をそんなに知ってるのかは追求しないでおいてやるが、・・・・・・今は家にいると気まずいんだよ」
「気まずい？　あれ～でも先輩一人暮らしでしたよね？」

・・・・・・完全に墓穴を掘った
一人暮らしなのに気を使う相手がいるなんて不自然極まりない
俺だって変だと思うだろう
「あー、親戚の子が来てんだよ」
「なんのためにですか～」
「なんでそんなに気にすんだよ、えーっと確か観光のためとか言ってたな」
「ふ～ん、たしかに東京は観光名所多いですからね～」
　若干含みのある言い方をされたが納得してくれたようだ
　これ以上追求されると面倒になる、そう思った俺はカツ丼を急いで食べ終えると
「じゃあ俺は行くから、ゆっくり食べてていいぞ」
　ゆっくりの部分を強調していうと席を後にする
　彼女は「また一緒に食べましょうね～」と手を振っている
　こちらとしてはもう遠慮したいものだ、また追求されるとボロが出かねない

　その後はスーパーで夕飯の食材を買ってからバスに乗って帰る
　家に帰ると人の気配がした、どうやら楓はまだここに居るようだ
　勝手にいなくなるなんてことはないと思っていたがなぜかいるこ

とがわかると不思議と安心する自分がいる
テーブルの上に置いていった書き置きもそのままだった
食材を冷蔵庫にしまってから寝室に行くとベットの膨らみが一定の間隔で上下している
どうやら寝ているらしい、夕飯ができるまでは寝かせてあげよう
そう思い静かに戸を閉める

「おーい、夕飯できたぞー」
今夜はカレーだ、簡単に作れて味もいい一人暮らしの味方な料理
ほんとはもう少し量を作ったほうが美味しくなるのだが楓はそんなに食べないだろうからしかたない
自分の分を皿によそいつつ声をかけるが返事はない
「まだ寝てんのか？」
皿を机の上に置いて寝室の扉を開ける
案の定楓はまだベットの中だ
「おーい楓ー、夕飯出来てんぞ」
少し肩をゆするが起きない、というか若干呼吸が荒い気がする
心配になって少し大きめな声で声をかけつつこちらに顔を向けさせる
「おい楓、お前大丈夫か――――――――――って！」
「ハァ、ハァ」
楓は顔を赤くして汗をかきながら苦しそうにしている
慌てて額に手を当てると
「かなり熱いな・・・・多分風邪だろうけど、風邪薬まだあったか？」
本来なら病院に連れて行った方がいいのかもしれないが俺は彼女の保護者じゃない
保険証なんかも持ってないのに病院は行かせられないだろう
幸いにも風邪薬はまだ余っていた、少し前に買ったものだが使用期限なども問題なかった
コップに水を汲んで薬と一緒に持っていく

「ゲホッゲホッ、ハァ、ハァ」
帰ってくると楓はさっきよりも苦しそうにしている、起こすのも気の毒な気がしてくるが薬を飲まなければ治るものも治らない
「おい楓、大丈夫か？薬持ってきたぞ」
そう言って少し強めに肩を揺する
「ん、んぅ・・・・・あれ・・・？」
「起きたか、とりあえず薬飲め。食欲はあるか？おかゆぐらいなら作るが」
楓はボーッとした目で薬と水を受け取りそのまま飲み込む
少し飲みにくそうだったがうちにゼリー状のものはないので我慢してもらうしかない
なんとかコップ一杯の水で飲み込めた楓はこっちを見て少し止まったが俺の質問に答える
「・・・・・食欲は・・・・無い」
「そうか、なら早く布団入っとけ。暑いと思うけど毛布はかけとけよ」
そう言うと楓を寝かせ毛布をかけてやる
濡れタオルなんかも必要だろう、それから押し入れに仕舞いっぱなしの加湿器なんかもあったほうがいいか
準備するものを頭で整理してから持ってくるために一度離れようとすると後ろから服を軽く引っ張られる
首を回して確認すると毛布から片手だけ出して服の裾をつまみこっちを見ている楓と目が合う
「・・・・・・・・」
「どうした？　なんか欲しいもんがあんなら買ってくるぞ」
そう聞くと楓はゆるゆると首を振る
「じゃあやっぱりおかゆ食べるか？それとも――――――――――――」
「ここに・・・・・・いて・・・・・・・」
いつも通り無表情にそう言ってくるが楓の目の奥には寂しさが感じられた

――――――――――――――――――――ああ、俺も昔風邪ひいた時は無性に寂しかったっけ
楓も昔の俺と同じで人の温もりが近くにないと不安なのだろう、そう思うと楓のこんなわがままも可愛く思えている

「・・・・・わかったよ、お前か寝るまでここにいてやる」
そういってベットに寄りかかるように座る
少し体をひねって彼女の方を向くと目が合う
「・・・・・どうして・・・・・そこまで、してくれるの？」
「自分で言っといて変な奴だな。――――――――昔の俺に、似てるからかもな」
そういって頭を撫でてやると楓はほんの少しだが嬉しそうに笑い目を閉じる

しばらく頭を撫でていると静かな寝息が聞こえてきた
無事に寝てくれたことに安心しつつ離れようとすると服が引っ張られる
「――――――――まったく、服掴んだまま寝てんじゃねぇよ」
そう言う俺の声色も、どこか嬉しげなものだった

三日目

窓が揺れる音がする、それに雨の打ち付ける音も
目を開けると薄暗いいつもの寝室が目に入る窓の揺れはどうやら外の風が激しいからのようだ
ひとまず起きようとすると全身が凝り固まっていて違和感を感じた
なぜ？と思いあたりを見回してからようやく気づく
あの後楓が服を掴んだままだったため動くことが出来ずそのまま床に座って寝たのだ
ならばこの違和感も当然だろう

楓を見てみると昨日のように呼吸が荒い、なんてことは無い
額に手を当ててみると少し熱い気もするが微熱程度だろう、後で熱も測ろう
しかし
風呂に入る前だったため少々臭うのが自分でもわかる
楓も起きて目の前にいる男が臭いのは嫌だろう、幸いにも手はもう離れている
起きてくるまでに上がってきてしまおうと早足で着替えを揃え風呂に入る

十分ほどで上がってくると楓が起きていた
「起きてたのか、調子はどうだ？　食欲は？」
「・・・・・体調はもう・・・・・大丈夫、食欲は・・・・・あんまり無い」
「そうか、でもおかゆぐらいは食べろよ。なんも食わないとぶり返すかもしれないからな」
そう言って台所に向かう、お粥なんて作ったことはないが調べながらやれば問題ないだろう

お粥は問題なく作れた、味は塩のみだがそっちの方が食べやすいだろう
「ほら、お粥作ってきたぞ。熱いから食べるときはよく冷ませよ」
「・・・・ありがとう」
ベットの上で食べるのはあまりお行儀が良くないのだがこんなときくらいいいだろう
楓はスプーンで少しすくうとふー、ふーと息をかけ冷ましてから口に入れる
「・・・・おいしい」
「そうか、ならよかった」
笑って返すとなぜかそっぽを向かれた、耳が赤いが体調がまた悪くなったのだろうか
「やっぱりまだどっか悪いのか？　それならまだ寝てた方が――――――」
「大丈夫・・・・・だから」
食い気味に答えるとこちらを向くことなくお粥を食べ続ける
「それならいいんだが・・・・・、なんかあったら言えよ？」
俺の言葉を聞いた楓は食べるのを止めてこっちを見つめてくる
「・・・・・・あなたは・・・・・・・どうして」
そこまで言ってから一度言葉を切り、再度、今度は切らずに言葉を紡ぐ
「どうして、見ず知らずの私にここまで優しくするの？」
そう聞いてくる楓の瞳には様々な感情が渦巻いている
昨日、同じ質問をしたことは覚えてはいないらしい。まあ熱で意識が虚ろだったのだろう
「――――――――――そうだな、お前には話してもいいかもしれない。
でもその前に飯食っちまえ、それからタオルと着替え持ってきてやるから汗拭いて着替えろ。話はそれからだ」
そう言うと楓はジッと俺を見たあと「わかった」と言って食べ始める

俺は立ち上がって着替えとお湯で温かくしたタオルを準備しにいく

戻ってくるのと楓が食べ終わるのはほとんど同時だった

入れ替わりで食器を受け取り着替えとタオルを渡す

そのまま寝室の扉を閉め、終わるまでに食器を洗っておく

洗い物を終え少し待ってから声をかけようか迷っていると

ガチャ　　と寝室のドアが開き出会った時のワンピース姿の楓が出てくる

「もう寝てなくてもいいのか？」

「・・・・・うん」

「そうか、じゃあそこらへんに座ってくれるか」

そう言って俺と対面になるように座らせる

「――――――――なんで俺がお前に優しくするのか、だったよな」

「・・・・・うん」

「――――――――俺の両親は世界でも有数の学者でな、俺が小さい頃からあんまり家にいなっかたんだ。それでも送り迎えとか、休日にはできるだけいるようにしてくれてたし、お手伝いのおばあさんも雇って俺が一人になる時間を無くしてくれた。だからそこまで寂しいって感じたことはなったかな

俺が小学校に上がるときだったな、二人に言われたんだ

『入学式の日に大事な仕事があって行けない』って

そりゃもうぐずったさ、せっかくの入学式なのに親がいないなんてありえなかったからな

二人もなんとか納得させようとしたけど結局は諦めてその日の夜の便で行っちまった

結局入学式にはお手伝いさんが来てくれて、なんだかんだ俺も新しい友達作って二人が来てくれなかったことなんてもうほとんど忘れてた

学校が終わって帰るとお手伝いさんが泣いてた、
向かいには知らない男がいてこっちを見ると『息子さんかい？』って聞いてきたんだ。
そうだって答えると男は辛そうな顔をしながら『落ち着いて聞いてくれ』って言ってきた。
その言葉の続きは今でも鮮明に思い出せるよ

『ご両親の乗られてる飛行機が海に墜落した、まだご遺体は見つかっていない、だけどもう恐らく――――――――――亡くなってる』

この男は何を言ってるんだ、そう思ったさ。この男が嘘をついているんじゃないか、きっとそうに違いない。お父さんもお母さんもしばらくしたら帰ってきてくれる、いつもみたいにお土産片手に帰ってきて頭を撫でてくれるんだ。そうじゃなきゃいけないんだって思った
今思えばそうだって信じないと俺の心が壊れるって頭が判断したが故の結果だったんだろうな。俺はその男を嘘つきだと言って家から追い出した
その人も俺のことを思ってか抵抗せずに帰っていった
戻るとお手伝いさんが俺のことを抱きしめてきた
俺は、あの人が嘘をついてるだけで二人は帰ってくるんだよね？
そう聞いた、そうだって言って欲しかったんだ、でもお手伝いさんは辛そうな、本当に辛そうな顔をしながらも俺の目を見て言いきった
『いいえ、お二人はもう帰ってこないんです。もう――――――――亡くなられたんです。死んでしまった人はもう、帰ってこないんです』
その言葉を聞いた瞬間俺の心にひびが入る音が聞こえた気がしたよ
そのままお手伝いさんの胸の中で泣いた、泣きまくった。最後には泣き疲れてそのまま眠ってしまうぐらいには大泣きしてたと思う
次の日起きたときにも両親はいなかった、
リビングに行くと書き置きがあった

『役所に行ってきます、お留守番しててくださいね』
お手伝いさんの字で短く、役所に何をしに行くのかもわからないものだったが薄々は感づいていた。少し前に父さんが亡くなった身寄りのない友人の死亡届を出しに行ってるのを見ていたから
帰ってきたお手伝いさんに何をしに行ってたのか聞いてもやっぱり答えてはくれなかった
それでも俺は心のどこかでまだ二人は生きているんじゃないかって思ってた、いや、思っていたかったんだな

しばらくして二人の葬式が行われた、たくさんの人が来て空っぽの棺に頭を下げていったよ。俺はそんな光景を見て何故だか無性に腹が立ったんだ、それで勢いよく走って行って棺桶の蓋を開けて叫んだ
『お父さんもお母さんもこの中にはいない！まだどこかで生きてるんだ！
勝手に殺すな！』
ってな、そのあと葬儀場から走って逃げ出して近くの公園の木の下で座ってたらお手伝いさんが見つけてくれた。そのまま無言で俺を抱きしめて頭を撫でてから
『もう、帰りましょうか。今夜は坊ちゃんの好きなものを作ってあげます。だから――――――――ね？』
そう言って手を差し出してくれた、俺は何も言わずに手をつないで帰ったよ
そのあとはいろんなことがあった、お手伝いさんが俺の後見人になってくれたり、そのお手伝いさんが高校入学と同時に倒れて余命一年もないって言われてたのに、俺が卒業して一人で生きていける歳になるまでは死ねないって言って本当に卒業するまで見守ってくれた。
そんな彼女の葬式をしたりね・・・・・
ああ、悪い。話が逸れたな、で、なんで優しくするのかだけど。
単に助けたいって心のどっかで思ってたんだろうな、二人が死んで親の愛なんて少しの間しか受けれなかった俺を助けてくれたあの人みたいに

俺も、同じように親の愛を受けれなかったお前の力になってやりたかったんだと思う」
そこまで一気に話し終えた俺は一息つき飲み物を手に取り喉を湿らす
話してる間ずっと黙っていた楓の方を見ると
――――――――――泣いていた
声を出さず、いつもの無表情のままだったがたしかに目から涙が溢れていた
「楓、泣いてるけど・・・・どうしたんだ？」
「え？・・・・・・あれ、私・・・・・・どうしてだろう」
そう言って手の甲で涙を拭う、しかし涙は後から溢れてきて頬を伝う
「・・・・・あ、あれ？・・・・・・どうして・・・・・・止まんないの」
涙が止まらないことに戸惑いつつも顔を手で覆って涙を止めようとする、かすかにだが楓の肩が震えていた
俺は黙って席を立つと楓の横に立ち頭に手を置く
「ありがとな、俺なんかのために泣いてくれて」
そのまま撫でてやると楓が座ったまま抱きついてくる、それに合わせるように軽く抱きしめ返す
しばらく俺達はそのまま動かなかった

「――――――――――落ち着いたか？」
「・・・・・うん・・・・・・ありがとう」
離れた楓は少し寂しそうな顔をしていた気がしたがすぐにいつもの無表情に戻ってしまう
「――――――――――お茶、もう一回入れてくるな」
そう言って台所に戻って冷蔵庫からペットボトルを取り出しコップに注ぐ
戻って椅子に座ると楓が口が開く

「・・・・・・・お父さんも、昔は優しかったの
お母さんがいる頃は、どこにでもいる普通の家族だったと思う。
毎日が楽しくて、幸せ・・・・・だったんだと思う
・・・・・でも、私が6年生に上がった時に二人が離婚して私はお父さんに引き取られた。
しだいにお父さんはお酒をよく飲むようになって、仕事には行ってたけど何か仕事で嫌なことがあった日にはお酒をたくさん飲んで、私にあたるようになった。
休日は昼間から飲んで機嫌が悪いと暴力を振るう、そんな日々だった
それでも・・・・・いつかお父さんも立ち直って前みたいな、優しかった頃のお父さんに戻ってくれる。そう信じてたの
でも、あなたと出会った日、
『子供なんて押し付けやがってあのクソアマ、自分の嫌なことは昔から俺に押し付けやがる。・・・・・あ？　何見てんだよ、テメェは俺に生かしてもらってんだ、黙ってサンドバックになってればいいんだよ！』
そう言って殴られた、その時に気づいたの
私はお母さんからもお父さんからもいらない存在だったんだって
お父さんはもう昔みたいには戻らないって
そのあとお父さんが酔って寝たのを確認して家から逃げ出した、あの家には居られないし、何より私がもう逃げ出したかった

そのあと貴方に拾ってもらって、一人で家にいた日。
・・・・・不安で仕方なかった、もしかしたら追いかけてくるんじゃないか、もう居場所がバレてて今こっちに来てるかもしれない。そう思うと震えが止まらなかった
しばらくしたら熱が出て頭がぼーっとして、風邪だって思ってすぐに寝てたの、寂しさと不安で心がいっぱいだったけどなんとか眠れた
・・・・・起きると貴方がいた、心配してくれて、優しくしてくれて、私のわがままにも付き合ってくれた

・・・・・・・すごく、嬉しかった。
人に優しくされるのがこんなにも心を暖かくしてくれるものだって思い出せた
だから、私はもう十分貴方に救われてる。――――――――――――ありがとう」
そう言って笑う楓の笑顔は今までのどんな表情よりも輝いていて、眩しかった
「――――――――ありがとな、そう言ってくれるなら俺も救われるってもんだよ」
俺のしたことは無駄じゃなかった、そう言われたことの嬉しさからか年甲斐もなく泣いてしまいそうになった俺は慌てて顔を背ける
「ど、どうしたの？　私何かよくないこと言っちゃった？」
「・・・・・いや、逆だよ。そう言ってもらえたことが嬉しくってな、つい」
いつまでも情けないところを見せたくはないのでゴシゴシと目を擦ってもう涙が出てきてないことを確認すると楓の方に向き直る
楓は俺と目が合うと安心したような穏やかな笑みを浮かべて
「・・・・・そう、ならよかった」
ドキッ
いやドキッってなんだよ、相手は楓だぞ？
というかこの感じはマズイ。何がとは言えないがとにかく良くない気がする
そう思った俺は話題をそらしにかかる
「い、いやそれにしても。楓が今日はよく笑ってくれて俺はよかったよ」
「え。・・・・・そうだったかな？」
そう言って自分のほっぺをムニムニと触って難しい顔をする楓
「どうかしたのか？」
「・・・・・私、変な顔してなかった？」
「いや、年頃の女の子らしい可愛さのあるやつだったけど」
「か、可愛い!?」

「ああ、そうだったと思うが・・・・・」
そう言うと楓は顔を真っ赤にして俯いてしまう
「・・・・・おーい、大丈夫か？」
呼びかけても応答はない、熱がぶり返したのかと思い額に手を当てても反応がないし俺の手もそれなりに温かいせいかイマイチわからない
コツン
「う～ん、熱はそんなにないみたいだけど。やっぱり体調悪いか？」
楓の額に俺のを合わせるやり方で熱を測ってみてもそこまで高くないようだが――――――
「!!!　なな、何して！」
「いや、熱でもあるのかと・・・・・」
「っ～～～～!!　バカッッ!!」
それだけ言うと楓は寝室に駆け込み荒っぽく戸を閉める
1人残された俺は楓の唐突な行動に完全に固まってしまい、側から見れば随分間抜けに見えるだろう
少しして落ち着いた俺の最初の言葉に返してくれる人は、当然ながらいなかった
「――――――俺、なんかしたか？」

四日目

トン　　　トン　　　トン

少し前までよく聞いていた懐かしい音がする
この音・・・・・どこで聞いたんだっけ
眠気から覚めきってない頭で記憶を掘り返す
確か・・・・・ああ、お手伝いさんや母さんが料理をしてるときだ
そこまで思い出してようやく少しだが頭が回り始める、と同時に当然の疑問が湧き上がる
いったい誰が料理をしてるんだ？
それを確かめるために俺は眠気を振り切って布団から這い出る
欠伸を噛み殺しつつ寝室を出てキッチンを見ると
――――母がいた
「・・・・・母・・・・・さん？」
そう呼びかけると母は料理の手を止めてこちらに振り返る
「・・・・・どうしたの？」
俺の記憶に残る母の声が耳に響く、思わず駆け寄ろうとしたところで気づく
俺は夢から覚めていないんじゃないか
そう思った俺はゴシゴシと目をこすり頬を思いっきり両手でつねってからもう一度キッチンの母を見る
「・・・・・雅紀、大丈夫？」
そこには貸した寝間着のままで料理をしている楓がいた
こちらを少し心配したような目で見ている
「――――あ、ああ。悪い、寝ぼけてたみたいだ」
まさか楓と母さんを見間違えるとは、久しぶりに昔を思い出したからかもしれない
「――――あれ？　楓いま俺のこと雅紀って」
「・・・・・雅紀は私のこと楓って呼ぶのに、私がいつまでも『あなた』

じゃ変だと思ったから」
「あー、確かに？　いやでも急に呼ばれるとなんだか照れくさいな」
そう返すと「・・・・・雅紀は最初から私のこと名前で呼んだのに」と言われた
妙に視線が恨めしさを含んでいる気がするのは俺の気のせいだろうか
「あー、えーっと、そういえば！　楓は台所で何してたんだ？　こんな朝っぱらから」
話題をそらしたのがバレバレだったが幸いここで終わりにしてもらえるようだ
楓は少し呆れたような顔をして
「・・・・・朝に台所ですることなんて一つしかないと思うんだけど」
そう言って少し横にずれる
後ろには火にかけられてる鍋や均等に切られた食材たち、すでに焼き終えて皿に乗った鮭なんかがあった
「まさか、朝飯作ってくれたのか？」
「・・・・・泊めてもらってるんだから、これくらいはする」
少し照れくさそうに言う楓
その姿が微笑ましくて思わず口元が緩む
「そっか、ありがとな。あったかい朝食なんて久しぶりだよ」
そう感謝の気持ちを伝えると楓は嬉し恥ずかしといった感じで
「・・・・そう」とだけ言うと目をそらす
本人は隠してるつもりかもしれないが頬が少し赤いし髪の毛をいじっている手が先程から落ち着きを欠いている
出会った頃は無表情で感情の機微がわからないと思ったが一緒にいると次第にわかるようになってきた、
所々ではあるが喜怒哀楽の表情だって顔に出てる
出会った頃はほとんど表に出てこなかったが最近は少しずつ感情が表情に出始めていることに嬉しさを抱いていると
「・・・・何ニヤニヤしてるの、まだご飯できるまで少しかかるから椅子にでも座って待ってて」

冷えた目でそういうとまた包丁を手に持ち料理を再開する、俺、ニヤニヤしてたか？
・・・・・いや、していた気がするな
特に反論することなく椅子に座って待つ
キッチンに目を向ければ朝食を作っている楓
料理の音と人のいる暖かさを感じていると眠気が再び戻ってくる
そういえば今日はいつもより少し起きたのが早かったな、楓もまだ時間がかかると言っていたし
――――――少しぐらいなら、寝てしまってもいいだろう

「んぁ・・・・・・寝すぎたか？」
大して長い時間は寝てなかったと思うが、待たせてしまっただろうか
そう思って机から顔を上げると
――――――目の前に楓の顔があった
「へ？」
思わず変な声が出てしまったが楓の方はそれどころでは無いらしい
「！　っ～～～～～！　ここ、これは、その、違くてっ！」
「違うって、何がだ？」
「～～～～～～～!!!」
こちらが見ていて心配になるほど楓の顔が赤くなっていく、色的にはトマトやリンゴレベルに真っ赤だ
――――――ってそうじゃなくて
「お、おい。なんだか知らんがとりあえず落ち着けって顔真っ赤だぞ」
「・・・・・・・・・・分かってるから・・・・・・とりあえず離れて」
「お、おう」
恐ろしく冷めた声に若干ビビりつつ距離を取る、顔を手で覆っていて表情が見えないため余計怖い

少しするといつもの無表情な楓で立ち上がって
「・・・・・ご飯もう出来てるから、運ぶの手伝って」
それだけ言うとスタスタとキッチンの方へと歩いて行ってしまう
「あ、ああ。分かったよ」
なんだか今日は朝から楓の感情が荒ぶっている気がするが、何にせよ元に戻ってくれてよかった

――――――――――――――――頬がまだ少し赤かったのは、指摘しないほうが身のためだろうな

「しかし、楓が料理上手だったとはな」
「・・・・別に、そんなに上手くないよ。・・・・お母さんがいなくなって必要だったから覚えただけ」
「それにしてはずいぶん上手だよ。そういえば、楓って何歳なんだ？」
「・・・・・・・・・・１４」
「ってことは中学二年生か、懐かしいなぁ俺もあの頃は――――――――」
「・・・・雅紀？」
急に話すのをやめた俺を不審に思った楓が声をかけてくる
「なあ楓。お前、学校って大丈夫なのか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「黙って目をそらすな、まあ気づかなかった俺も大概だが。これからどうしたもんか」
「・・・・・でも私、何も持ってきてない」
「そうなんだよなぁ、まさか取りに行くわけにもいかねぇしな」
もう４日も学校を休んでいることになる、流石に誰かが怪しいと思ってきてもおかしくはない
「・・・・・今考えたってしょうがないな、この問題はまた今度にしよう」

「・・・・・うん」
問題の先延ばしは好きではないが現状どうすることもできないことを悩んでるのも意味がない
なら今は考えないのが一番だろう
「おっ、これ美味いな。どうやって作ったんだ？」
「それは――――――――」
それに久しぶりの誰かと食べる朝食だ、考え事をするのは野暮だろう

時刻は昼前、今日は午後から講義があるためそろそろ家を出なければ
準備をしていると楓が声をかけてくる
「・・・・・いつ頃帰ってくる？」
「ん？　ああ、そうだな。だいたい１９時半ぐらいだと思うが、どうかしたか？」
「・・・・・そう、わかった。帰りに食べたい夕飯に必要な食材を買って帰ってきてね」
それだけ言うと寝室に戻ってしまう
なんだか不思議な気分だがとりあえず忘れずに買って帰ることにしよう
「それじゃ、行ってきます」
「――――――――行ってらっしゃい」
慌てて扉をあけて返してくれた楓がなんだか面白くて少し笑ってしまったが幸い気づかれなかったようだ
バレるとまた拗ねてしまうので急いで行くことにしよう

外は相変わらず雨が降っている、昨日に比べればいくらか弱くなっているものの止む気配はなく相変わらず人の多いバスは少し蒸し暑い

最寄りのバス停で降りると後ろから声をかけられる
「あれ～？　先輩じゃないですか、一昨日ぶりですね～」
・・・・・・最初に会ったのがこいつとは、今日は厄日か
「ちょっと～無視しないでくださいよ～」
いつのまにか俺の前にいた麻衣がピンクの傘を手に下から俺を覗き込んでいる
「――――――――ああ、悪いな。今日はどうにも良くないことが起こりそうな気がしてな、だからお前も俺に近づかないほうがいいぞ」
「へ～そうなんですか。先輩に超能力があったなんて驚きですね～」
「せっかくの俺の忠告を無下にするんじゃねえよ」
「だって先輩の勘って外れそうじゃないですか～」
サラッとひどいことを言ってくる後輩を連れたまま大学へと向かう
「そう言えば～先輩昨日はどうして大学に来なかったんですか～？講義入ってましたよね」
「だからなんでお前が俺の予定を知ってんだよ。・・・・・親戚の子が来てるって言っただろ、その子が風邪引いたから看病してたんだよ」
「へ～、じゃあ今先輩が来てるってことはその子はもう良くなったんですか？」
「ああ、もう大丈夫だろ」
「それは良かったですね～。
・・・・・・・・・先輩の看病、いいなぁ」
「ん？　なんか言ったか？」
「なんでも無いですよ～。そういえば先輩、行く気になってくれました～？」
「・・・・・なんの話だ？」
「も～覚えててくださいよ～、明日の休みに一緒に出かけましょうって誘ったじゃないですか～」
「・・・・・ああ、そんな話もあったな」

「それで、行く気になってくれましたか～？」
・・・・・正直な話、めんどくさい。それにこいつと出かけるのは中々疲れそうだ。そう思い断ろうと口を開きかけた時、家にいる楓のこと思い出す
「――――――そうだな、悪くない」
「え？」
俺が了承するとなぜか誘ってきた麻衣の方が驚いた表情をしている
「なんでお前が誘ってきたくせに驚いてんだよ」
「え、いやだって先輩いつもこういうのは断ってましたし。今回もてっきっり断られるものだって思ってて・・・・・・」
「・・・・・・口調がブレてるぞ」
「え？　・・・・・・あ、も～先輩気づいてたなら教えてくださいよ～」
慌てて口調を戻す麻衣を置いといて俺は話を続ける
「それで、出かけるって話だが俺の他にもう一人連れてくからな」
「もう一人ですか～？」
「ああ、さっきも話に出た親戚の子だ。服を買いたいらしいんだが女物は俺にはサッパリでな、だからこの際お前に選んでもらおうと思ったんだよ」
「・・・・・しょうがないですね～、まあいいですよ」
なぜか少し不満げな麻衣
「なんか都合悪かったか？」
「いえいえ、都合は悪くないんですけどね～」
なら何が問題なのだろうか、もしかして他に行きたいところでもあったのか？
「そうですね～それじゃあ明日の朝９時に××駅前に集合にしましょうか」
「ん、わかった。よろしくな」
「は～い、先輩も遅れないでくださいね～♡」
お得意のウインクを残すと彼女は走って行ってしまう、どうしてこう俺に向けてウインクしたがるんだあいつは

彼女のピンクの傘が見えなくなった頃、つい思っていたことが口から出ていた
「・・・・・・あいつ、さっきの口調のがいいと思うんだがな」

その日、俺は言われたとうり好きな食べ物
――――――オムライスに必要なものを買ってから家に帰った
オムライスと言ったら楓に「・・・・・子供っぽい」と笑われたのは地味にショックだったが・・・・・そんなに子供っぽいだろうか？
「それで、どうして急に俺の好きなものを作る気になったんだ？」
「・・・・・別に、あんまり考えてなかった。・・・・強いて言うなら夕飯を考えるのが面倒だったから、かな？」
「そこは嘘でも俺が喜ぶようなことを言って欲しかったな」
「・・・・・例えば？」
「む、例えば――――――」
自分で言っておきながらいい例えが思いつかない
・・・・・ここはネタで誤魔化しておくか
「そうだな『べ、べつにあんたの喜ぶ顔が見たかったわけじゃないんだからね!!』とか」
「・・・・・・・・・・・そう」
「いや待て今のはネタだぞ？だからそんな目で見るな、その目は流石にメンタルにくる」
まさかちょっとした冗談でこんなに引かれるとは思わなかった、まるで変質者を見るかのような目で見られて正直泣きそうだ。次からはこういうネタは控えよう・・・・・
「・・・・・そんなこと言ってないで、もう出来たから持ってって」
俺と話してる間もテキパキと作っていたらしい、皿の上にできたて

のオムライスがのっている
「はいよ、しかし相変わらず料理が上手いな楓は。俺が作るとこんなに上手く卵で包めないからな」
「・・・・・コツさえつかめば誰だってできるよ」
「そんなもんかねぇ」
食卓に二人分のオムライスを置いて向かい合うように座る
「いただきます」
お互いを待って一緒に言うとさっそくスプーンですくって口に入れる
「――――――――うん、美味い」
素直な感想を言うと楓は少し照れながら「・・・・そう、ならよかった」とだけ言うと自分の分を食べ進める
「――――――――あ、そうだ楓。明日は少し出かけるぞ」
「・・・・出かけるって、どこに？」
「お前の洋服を買いにな、今は楓も俺の服とか着てるけどほんとだったらちゃんと女子用の服を着た方がいいだろ？」
「・・・・・でも私、お金払えないし・・・・・それに外に行くとお父さんに会うかもしれないから」
そう言うと楓は少し悲しそうな目をして俯いてしまう
「あーっと、まず金のことだが。俺が払うから楓は気にすんな、二人の遺産が俺一人じゃ使いきれないくらいあってな。少し使ったぐらいじゃ減った気にもならないさ。
それとお前の親と会った時には――――――――」
そこまで言って言葉に詰まってしまう、自然と視線が下に落ちて考える姿勢になっていく
――――――――俺は楓の親に会って何を言えばいいのだろうか
もちろん言いたいことは腐る程あるが、頭の片隅で
『他人のお前が口を出す資格があるのか？』
そう問いかけてくる自分も確かにいる
ここまで関わっているが俺は所詮他人だ、楓の家庭内のことにまで

干渉する権利はない
　そんな俺に何か言う資格があるわけ――――――――――――――――
「・・・・・・雅紀」
　名前を呼ばれ顔をあげると少し困ったような顔をした楓がいる
「・・・・・・・私のことを真剣に考えてくれるのはすごく嬉しい、でもそれが雅紀の重荷になってるなら、それは私にとってとても悲しいことなの。
・・・・・・・だから、私のことは気にしないで。服を選べないのは少し残念だったけど、私のワガママであなたが困るなら私は――――――――」
　その時の楓の顔を見て俺の中で歯車が噛み合う感覚がする
――――――ああ、なんだ。簡単なことじゃないか、どうして今まで気づかなかったんだろうか
「おら」
「キャ！」
　俺は話を遮って楓の頭をグシャグシャと乱暴に撫でる
　撫でている手の隙間から楓が驚いた表情で聞いてくる
「ど、どうしたの急に」
「お前はもっとワガママなくらいでちょうどいいんだよ、変に遠慮するくらいならワガママ言ってくれた方が俺だってやりやすい」
「で、でも」
「遠慮すんなって言ったろ？　子供はワガママでいいんだよ」
　俺は楓に普通の幸せを知ってほしい、そう思ったから今までこうしてきたんだ
　ならこれからもそうすればいい、楓が幸せになれる道を探してやればいいんだ。
「子供って、私はそんな歳じゃ・・・・・」
「――――――――――――楓の親と会った時には俺がなんとかしてやる」
「・・・・・なんとかって、どうするの？」
「なんとかはなんとかだよ。大丈夫だ、俺がお前が幸せでいられる道

を探してやる。だから心配すんな」
おお、我ながら恥ずかしいことを言っている気がする
人生でこんなこと言う機会はもう二度とないだろうな、そんな気の抜けたことを考えていると
「っ～～～～!!　そ、そそそれってプっプロ、プロポ」
楓が真っ赤になってオーバーヒートしそうになっている
「うおっ！大丈夫か楓、一旦落ち着け」
「～～～～～！　～～～～～～!!　～～～～～～！」
落ち着かせようとしても楓は完全にテンパっていてこちらの話がまるで聞こえていない
「一回落ち着け、な？　頼むから落ち着いてくれ、このままじゃ話もできないし何より夕飯だって――――――――――――」

その日はテンパった楓を落ち着けようとしてビンタされるわ夕飯を食べるタイミングを逃してオムライスがお預けになるわ、案の定楓は口を利いてくれなくなるわと散々な目にあった

――――――――――――――――――――これからは楓のテンパりそうな言葉は控えた方が良さそうだ

五日目

「楓ー、準備できたかー？」
「・・・・うん、大丈夫だと思う」
「よし、なら行くか」
楓の準備ができたのを確認して二人で家を出る
相変わらず天気は雨だが降り出した時よりもだいぶ雨脚は弱まっている
天気予報によると明日の昼過ぎには止む可能性があるとのこと
――――――――――雨が止んだとき、俺たちの関係はどうなるのだろうか
ふとそんな考えが頭をよぎる
最初の頃は深く考えなかったがその時が近いとなると嫌でも考えてしまう
俺は楓が幸せに暮らしていけるようにしてやりたい
その考えにいまでも変わりはないが――――――――
「・・・・雅紀、行かないの？」
楓に声をかけられ現実に意識が引き戻される
「――――――あ、ああ。悪いな少し考え事してて、それじゃあ行くか」
「・・・・・うん」
雨の中を二人で並んで歩く
楓には昔買って今は使っていなかった折り畳み傘を渡してある
俺には少し小さいが小柄な楓にはむしろ少し大きいぐらいだろう
「・・・・・・・・・・」
その楓は親に会わないかどうかが気になっているのか不安げな表情で周囲を常に見回している
それにさっきから俺の方に寄っては傘に阻まれて離れるという行為を繰り返していて正直怪しい人にしか見えない
「・・・・あー、楓？　不安なのはわかるからもう少し落ち着けって。見ててなんか怪しい人みたいだぞ」

「・・・・・そんなこと言われても」
「それなら前みたいに手繋ぐか？ってこれだと傘が邪魔なのか、それじゃあ――――――」
言いきるよりも早く楓は自分のさしていた傘を畳むと俺の傘の中に入ってくる
「・・・・・これなら、いいでしょ」
「お、おう。確かにこれで問題ないな、でもこれって」
「いいから・・・・・ほら」
「あー、まあいいか」
結局諦めて楓の手を握る、手を繋いで歩くのは楓を家に連れて行った時以来だ
楓は手を繋いだ状態で俺の方に寄体を寄せている
・・・・・まあ雨に濡れないようにするにはこうするのが一番楽だし当然と言えば当然か
そのままバス停まで行くといつもとは違う路線のバスで駅へと向かう
流石に乗るときには手を離していたがなぜか楓が少し不満げだった
俺は人前では恥ずかしいのでまた手を繋いで歩くつもりはないが
――――――――――――帰りぐらいならいいかもしれない
そのまま駅に着くと今度は電車を何本か乗り継いでいく
しばらく電車に揺られてようやく××駅に着いた
ここは大きなショッピングセンターや飲食店などが多く集まっていて買い物をするには困らない
「少し早かったか・・・・・？」
時刻は８時半、約束の時間よりも３０分ほど早く着いてしまった
遅れるよりはいいと思ったんだが早すぎるのも考えものだな
「あ、センパ～イ！早いですね～」
「あいにく人を待たせるのは嫌いな性格でな」
いつもどうり彼女は初めて見る服を着ていた

膝下ぐらいの丈の黒のスカートで裾のところには白で花や模様が入っている、上はストライプ模様の白のシャツ、胸元には小さくリボンをつけていて頭には少し小さめなベレー帽がのっている
「相変わらず服のレパートリーが多いな」
「む～そこは『可愛いな、似合ってるよ』って褒めるところですよ」
「ハハ、死んでも言わん」
「そんな～ひどいですよ～」
しかし、どうやら彼女も早く来るタイプだったらしい
これは家を早くでて正解だったな、あまり人を待たせるのは好きじゃない
「でも～、てっきり先輩は遅れて来るものだと思ってました～」
「お前の中の俺の印象はどうなってんだよ」
「ふふふ、秘密ですよ～。それで、その先輩の後ろにいる子がこの前話してた親戚の子なんですか～？」
「ああ、そうなんだが――――って何後ろに隠れてんだよ楓」
気づくと俺の後ろで服にしがみついて隠れていた
「お前って意外と人見知りするタイプだったんだな」
「・・・・・・・・・そんなことない」
「その間は気になるが。なら平気だよな、ほら挨拶しろ」
そう言って楓を麻衣の前に立たせる
が、そこまでしてようやく思い出した。楓に口裏合わせをするのを忘れていた
素直に話してしまうと非常にややこしくなるのが目に見えているが・・・・・・
上手く合わせてくれるだろうか
「はじめまして～、私は岡崎　麻衣って言うの。よろしくね～」
「・・・・・・・・三枝　楓って言います。・・・・・今は雅紀お兄ちゃんのところに居候してます、今日は・・・・よろしくです」
「へ～そうなんだ。私は先輩とは大学の先輩後輩でね～毎日ラブラブなキャンパスライフを――――」
おかしなことを言いはじめた麻衣に軽くげんこつを落とす

「キャッ！も～痛いじゃないですか、何するんですか～」
「ありもしない事を楓に吹き込んだお前が悪い」
「は～い」
「悪いな、こういうヤツなんだ。悪いヤツだけど仲良くしてやってくれ」
「・・・・・・さっきの話って」
「ん？ああ、嘘に決まってるだろ。てか、こいつの言うことは基本的に信じなくていいぞ」
「ひど～い、私そんなに嘘つきじゃないですよ～」
「どの口がそれを言うんだ？　ん？」
「いひゃいいひゃい、ひゃめへふふぁふぁい～」
「ったく、ほらさっさと楓の服買いに行くぞ」
「む～、わかってますよ。ほら楓ちゃんも行きましょ～」
「・・・・わかったから、手を引っ張らないで。それからもう少しゆっくり歩いて」
先を歩きつつこっそりと楓の表情を盗み見ると、口では文句を言いつつもその表情はどこか楽しげだ。麻衣の性格に助けられているのはなんとも言えないが、ここは感謝すべきだろう
・・・・・・口では言いたくないので心の中で感謝しておくことにしたが
「今先輩に感謝された気がします」
「んなわけないだろ」
――――――どうしてこう女は勘が鋭いのだろうか

「楓ちゃん、こっちとかどう？」
「・・・・よくわかんない」
「も～女の子なんだからもっとおしゃれには気を使わないとダメだよ～」
麻衣が服を持ってきて確認して、それに楓が曖昧に答える

その作業を繰り返してはや３０分、しかもこれは三件目だ
もうじき昼時になろうとしているが服選びが終わりそうな気配はない
「おーい二人とも、そろそろ昼になるがどうするんだ」
「え、もうそんな時間なんですか～？」
「・・・・・疲れた」
麻衣はまだ選びたそうだが楓の方は久しぶりの外出のせいか少し疲れているようだ
「店が混む前に先に入っておいたほうがいいんじゃないか？」
俺の言葉に仕切りに頷く楓、そんなに休みたかったのか・・・・・
「そうですね～、じゃあそうしましょうか」
麻衣の賛同も得られたことで目的が昼食を食べる場所探しに変わる
「楓ちゃんは何か食べたいものありますか～？」
「・・・・・特にない」
「う～ん、それじゃあ先輩のほうはどうですか？」
「ん？そうだな、ゆっくり食える場所がいいと思うが」
「む～、あっ！それじゃあそこの喫茶店なんてどうです？」
そう言って指をさした店はあまり人がいないためゆっくりできそうではあった
それにランチメニューがあるらしく軽いものだがそれなりに食べるものもありそうだ
「そうだな、いいと思うぞ。楓はあそこでいいか？」
「・・・・・うん」
「それじゃあ早速行きましょうか」
麻衣を先頭に歩き出す
ある程度距離が開いたのを確認してから今更だが楓に話をふる
「さっきは話し合わせてくれてありがとな、でもいきなりでよく合わせられたな」
「・・・・・別に、大したことじゃないよ」
「そうか？いやでも呼び方まで変えなくても良かったんだぞ？この歳

になって『お兄ちゃん』って呼ばれるのは流石に恥ずかしいからな」
「・・・・・ふーん」
「え、なんでそんな含みのある笑い方した？」
「・・・・・べつになんでもないよ『おにいちゃん』」
いたずらっぽく笑いながらそう言ってきた楓は先に歩いて行ってしまう
まさか楓からそんなことを言われるとは思ってもいなかった俺はしばらく固まってしまった
ようやく硬直がとけると、空を仰ぎつつ
「・・・・・・楓までアイツみたいになったら手に負えないぞ」
そう愚痴をこぼしてから後を追いかけた

「え～これもですか～？」
「・・・・・やっぱり服はよくわかんない」
「む～楓ちゃんの好きな服とかが無いと決まりそうに無いですね～」
昼食を食べ終えて服選び再開、したはいいものの相変わらず苦戦しているようだ
「そうだ！　センパ～イ、ちょっと来てくださいよ～」
少し離れたところにいた俺に麻衣が呼びかけてくる
「俺の意見は当てにはならないと思うが？」
「そうじゃなくて、先輩は楓ちゃんにどんな服が似合うと思いますか～？」
「うーん、正直わからんからお前に頼ってるんだが・・・・・白い服とかが良いんじゃないか？あとは、普段見ないスカートとか」
「ふむふむ、わかりました。それじゃあ私が先輩の要望にそってコーディネイトしますね～」
「いや、俺じゃなくて楓の要望を聞けよ」
「・・・・・私はそれでいい」

「本人の許可も取れましたし、早速行ってきますね～」
そう言うと楓の手を握って歩き出す、付いて行こうとすると
「あ、先輩は来ちゃダメですよ～。あとのお楽しみです♡」
お得意のウインクをかましてスタスタと歩いて行ってしまう
「だからなんでウインクしてくるんだよ。・・・・・・まあ待ってろって言われたし、大人しく待っててやるか」

2時間近く待っていると麻衣から電話がかかってきた
『もしもし～先輩ですか～？』
「他に誰が出るんだよ、あとまだ終わりそうにないのか？いい加減待ちくたびれたんだが」
『待てない男は嫌われますよ～。それと、もう先輩の後ろにいますよ～』
すぐ後ろから聞こえた声に振り返ると先程別れた麻衣が携帯片手に立っていた
手にはいくつか俺でも知っている服の店の袋を持っている、一着だけでは足りないと思ったのだろう、冷静な目を向けられた麻衣は少し不満そうな顔をする
「少しぐらいビックリしてくださいよ～、つまんないじゃないですか～」
「知り合いの声で驚くかよ、というか楓はどうした？」
「え？・・・・・あ、も～そんなところに隠れてないで。はやく見せてあげよう？」
そう言って近くの角から楓を引っ張ってくる
引っ張られて来た楓は白いストライプ柄の袖の短いシャツを着ていて
お腹のあたりのウエスト調節用の紐は前でリボン結びされている

下は膝上丈の同じ白のスカート、裾の部分には白のレースが縫い付けてあって可愛いというよりも綺麗な印象を与えている
着ている楓は恥ずかしそうにモジモジとしてしきりに髪の毛をいじっていてこちらの感想を待っているようだ
「ほらほら先輩、どうですか～？可愛いでしょ～――――――って、先輩？」
「・・・・・・雅紀、お兄ちゃん？」
何も反応を返さない俺を不思議に思って二人が声をかけてくる
声をかけられて意識が復帰した俺は慌てて反応を返す
「あ、ああ。悪いな、ちょっと驚いたから」
「驚いたって、何にですか～？」
「あー、なんだ、その、あまりにも印象が変わってて」
「・・・・・・やっぱり、似合ってなかった？」
そう言って楓は自分の服を少し悲しそうに見下ろす
「あーいや、そうじゃなくて。――――――き、綺麗だって意味だよ」
「・・・・・・え？」
「だから、いつもよりも綺麗になったって言ってんだよ。恥ずかしいからもう言わないぞ」
そう言うと俺は恥ずかしさから目をそらす
「・・・・・・うん、ありがと」
そう返してくれた楓の声色はとても嬉しそうだった
「あれれ～先輩照れちゃってます～？　可愛いとこもあるじゃないですか～」
そう言って麻衣は下から悪戯っ子のような笑みで俺を見てくる
「そんなにからかいたいならなら好きにしろ、そのかわり服を選んでくれたことへの感謝はしないぞ」
「え～、しょうがないですね。今は我慢してあげますよ」
「今後も我慢してもらいたいがな――――――助かったよ、ありがとな」
「ふふふ、また頼ってくれてもいいんですよ～」

「それは遠慮する、楓までお前みたいになったら困るからな」
「仲間が増えて私は嬉しいですけどね～、っとそういえば楓ちゃんが渡したいものがあるんでした」
「ん？　そうなのか？」
　そういえば楓はさっきから左手を後ろに回して隠していた
「うん、えっと、これは私からのいつものお礼」
　そう言って楓は紙袋を手渡してくる
「そんな礼なんて気にしなくても良かったんだが、いったい何を買ってきてくれたんだ？」
　そう言って紙袋の中を覗くとそこには数本の花がまとめられて入っている
「この花、なんて言うんだ？」
「・・・・リナリアって言うんだって」
「ほー、確かにあんまり見ない花だとは思ったがやっぱり知らないな。どうしてこの花を？」
「・・・・・最初に花を送りたいって言ったのは私・・・・それならリナリアって花がいいよって教えてくれたのが、麻衣さん」
「そうなのか？」
　今度は麻衣を見てそう問いかける
　だが、彼女は呼ばれたことに気づかずに渡されたリナリアと楓のことをどこか眩しそうに見ている
「・・・・・大丈夫か？」
　体調でも悪いのかと思い額に手を当てて声をかけてようやく気付いたのかこちらを見てくる
「――――――へ？　・・・・・・ふえええええ!?」
「うわっ！どうしたんだ急に!?」
　突然おかしな悲鳴をあげて飛び退く麻衣にさすがに驚いてしまった俺をよそに彼女は顔を真っ赤にしてこっちを見ている
「ど、どうしたんだってそれはこっちのセリフですよ！　なんで私のおでこに手を当ててるんですか!?」
「・・・・・いや、呼びかけても答えないし。様子が変だったから体調

でも悪いのかと思ったんだが」
「――――――あ、ああ、そういうことでしたか。ならすみません、急に叫んだりして」
そう言って申し訳なさそうにする麻衣
「いやまあ、なんともないならいいんだよ。気にすんな」
そう慰めるも相変わらずシュンとしている麻衣、どうしたものかと悩んでいると楓がポツリと呟く
「・・・・・麻衣さん、そっちの喋り方のがいいと思うよ」
その言葉にしまったと言わんばかりに口に手を当てるがもう遅いと悟ったのか大きなため息をつく麻衣
「ハァ～、やっぱり慣れない口調はボロが出ちゃってダメですね」
「――――――そっちが素の口調ってわけか」
「そうですね。あーあ、慣れないことなんてするもんじゃないですよ」
そう言ってバツが悪そうに笑う麻衣
「それで、なんであんな話し方してたんだ？」
「あーっとそれはですね――――――」
なんでも合コンの時にはキャラを作って参加していたらしいのだが
そこで会った俺と仲良くなりたいと思い探すとあっさりと見つけ、深く考えずに話しかけると俺の印象が合コンの時のものにかなり寄っていると気づき
とっさにその時の喋り方をしてしまったためそれ以来戻すタイミングが見つからず今までそのままにしていたらしい
「――――――というわけなんです」
「・・・ハァ、そんなこと気にしないで普通に話しかけてくれれば良かっただろうに」
「うう、そう言われればそうなんですけど。
・・・・・・・
あの時は先輩に少しでも近づきたかったんですよ」
「ん？最後の方なんて言ったんだ？」
「なな、なんでもないです!!」

そう言って手をブンブンと振りながら麻衣は否定してきた、楓には聞こえていたのかジッと麻衣のことを見ている
「楓は聞こえたのか？」
「・・・・・・うん、でも・・・・・教えない」
「・・・・・・まあいいか、ほら、やることも終わったし帰るぞ」
そう言って先に歩き出す、少ししてついてきているか後ろを振り返ると
「――――――――――」
「――――――――――」
麻衣が楓に何か内緒話をしている、またおかしなことでも吹き込んでいるのかと見ていると
突然楓の顔が赤くなって麻衣のことを恨めしそうに見ている
・・・・・・いったい何を教えたんだあいつ
二、三謝るような仕草をした麻衣は今度は逆に真剣な表情で楓に何か話している、楓も麻衣の目をジッと見つめてその話を聞いていて、旗からみれば睨み合っているようにも見える硬直が続き
「――――――――――」
その硬直は楓の言葉によって終わりを告げたようだ、麻衣を置いて一人小走りでこっちに来る楓
こっそりと麻衣の表情を見てみるとなぜか苦笑している
横に着いた楓に何を話していたのか聞いてみると
「・・・・・・秘密」
とだけ言って教えてはくれなかった、まあ女同士の話をあまり詳しく聞くのも野暮か
「ほら、お前も早くこないと置いてくぞー」
「あっ、ちょっとー少しぐらい待ってくれてもいいじゃないですかー」
「よし、帰るか楓」
「・・・・・うん」
「あー！　楓ちゃんまで、ヒドイよー」
その日は後から走ってきた麻衣を待ってからお開きとなった
途中帰りの電車が違う麻衣が楓のことを羨ましそうに、楓は勝ち

誇ったかのような笑みを浮かべていたのだが。俺が服の代金を渡していないことに気づいて渡しに行くと二人の表情が逆になったいたのは謎だった

――――――――――――――――まあ仲が悪いようではないから気にするまでもないな

「今日は楽しめたか？」

「・・・・・うん」

「そうか、それならいいんだ」

いつもの街並みを横に楓と傘をさしながら並んで歩く、どうやら手は繋がなくてもいいらしい

そのまま歩いて行くと俺たちの出会った神社が見えてくる、楓は何か見つけたのか鳥居の横で止まった

「・・・・・これって」

「ん？　何かあったか」

そう言ってて楓の横に戻って指差しているものを見る

「ああ、これか」

「・・・・知ってるの？」

楓が指差していたのは『雨神祭り』と書かれたポスターだった

「ここの神社は毎年この日にやってるんだよ、なんでも昔梅雨なのに雨が降らなくてこの日に雨乞いをしたら雨が降り始めたからそれを祝ってのことなんだとか。1日しかやらないし雨が降れば中止になるから俺も忘れてたな」

俺のおぼろげな知識を披露しているあいだも楓はポスターを見ている

「――――――――行きたいのか？」

「・・・・・うん」

「じゃあ行ってみるか、えーっと日付は明後日か」

日付と開始時刻を覚えている俺をよそに楓はどこか浮かない顔をしている

――無理もないか、天気予報では早ければ明日には雨が上がる。つまり俺たちの約束の期限が来るということだ

いまだに俺の中でどうすべきなのかは決まっていない、決めなければいけないとわかっていてもどこかで思考が堂々巡りになってしまい一向に決まらないのだ

「――祭り、楽しみだな」

「・・・・・うん」

思考を遮るように出した言葉に楓は少し無理をして笑い返してくれる

――いったい、俺は

「・・・・・お前、楓か?」

後ろから楓のことを呼ぶ知らない声、振り返るとそこには四十代前後のスーツを着た男が立っていた

知り合いかと尋ねようと楓を見ると目を見開いて傘の持ち手をギュッと握りしめている

そして、絞り出すような声で、男のことを呼んだ

「――お父さん?」

六日目

「・・・・・・・雨、止むんじゃなかったのかよ」
雨風が窓を揺らす音で目が覚めた俺は思わずそう呟いた
天気予報は昼過ぎと言っていたがこの雨で本当に止むのかは少し疑問だ
スマホで時間を確認すると朝七時過ぎ、少し早いがもう起きてしまおう
起きる際に楓を起こしてしまわないように静かに部屋を出る、幸い楓はまだ眠ったままだった
朝食は静かに作れるカップ麺で済ませる、本当なら楓の作ったものが食べたいが今はあまり起こしたくない
きっかり3分待ってゆっくりと食べる、時間はまだあるから急いで食べなくてもいいだろう
その後あらかじめ出して置いた着替えに着替え出かける準備をする
準備を終えもう一度寝室の楓を確認する
「・・・・・・まだ寝てるな」
そっと扉を閉めると机の上に書き置きを残すために紙とペンを用意する
『話をしてくる、家で待っててくれ』
そう短く書くとそれを残し玄関へと向かう、家を出る時の言葉は「行ってきます」ではなく自嘲の言葉だった
「――――――これじゃあ、あの時の彼女と一緒だな」

傘を手に待ち合わせ場所へと向かう
雨の中進むとあの神社が見えて来くる、相変わらずの雨のせいで人の姿はない
横を通り過ぎるとき、昨日楓が見ていたポスターが目に入る
「・・・・・・あの男、一体どういうつもりなんだ」

昨日のことを思い出していた俺の口から出た言葉は、誰に返されるわけもなく消えていった

「――――――――――――――――――――お父さん？」

楓の消えそうなほど小さな声、しかしそれは俺の耳にしっかり届いていた

「楓、今お父さんって――――――――――」

「お前、今までどこほっつき歩いてたんだ。ったく面倒かけさせやがって、ほらさっさと帰るぞ」

面倒臭そうにそう言うと男はこちらに近づいて来る

突然のことに動揺する俺をよそに楓を連れて帰ろうとする

「っ！　い、イヤ！」

楓はその手を振り払うと俺の後ろに逃げる、その声で動揺から立ち直った俺は楓をかばうように手を伸ばす

「あ？　なんだお前」

「・・・・・この子を預かっている、ただの大学生だよ」

手を払われたことか、見ず知らずの男が出しゃばってきたことか

――――――――――――――――――――おそらく両方だろうが。若干苛立った様子の男に軽く返す
「預かっていただ？　・・・・・・ああ、なるほど。そういうわけか」
俺と楓を交互に見て一人納得した楓の父親は薄気味悪い笑みを浮かべると
「明日の朝は暇だろ」
そう切り出してきた
「なに？」
「だから、明日の朝は暇だろって言ってんだよ」
「・・・・・たしかに用事はないが」
「なら明日の朝８時半に駅前の喫茶店で話そうじゃないか。もちろん、そいつのことで」
自分の娘のことを『そいつ』呼ばわりすることに若干の苛立ちを感じつつ平静を装って承諾する
「オーケー、なら明日の８時半だ。遅れてくんじゃねえぞ」
そう言うと父親はさっさと帰っていった、彼の行動の意図がつかめず去っていった方向をジッと見ていると
腕をギュッと強く掴む感覚が後ろからしてくる
腕の方を見れば楓が俺の腕に抱きついていた、後ろにはさしていた折り畳み傘が転がっている
『大丈夫か？』そう聞こうとして気づく、小刻みに楓の体が震えている
俺はもう片方の手で楓に触れようとしたが傘を持っているせいでうまくいかない
「楓、一回離れてくれるか？」
楓はピクッと肩を震わせたがゆっくりと腕から離れてくれる
俯いているため表情はわからないが悲壮的な雰囲気がにじみ出ている
俺は離れた楓の頭を抱え込むように腕を回すとそのままゆっくりと頭を撫でてやる
「大丈夫、大丈夫だ。だから、心配すんな」
そう声をかけると徐々に体の震えが収まっていくのがわかる、し

ばらくそうしていると小さな声で「もう大丈夫」と聞こえてくる

俺が手を離すと少し落ち着いた表情の楓と目が合う

「・・・・楓、明日は俺一人で行ってくる。お前は家で待っててくれないか?」

「で、でも・・・・・」

「ごめん、でもいざって時に――――情けないけど俺でお前を守ってやれるかわからないんだ。だから」

「・・・・・わかった」

「・・・・・ありがとう」

「でも、ひとつだけ約束して。必ず帰ってくるって」

そう言って俺の目を見つめる、その目には希望と不安が入り混じっていた

「――――ああ、約束する。絶対に帰ってくる」

俺がそう返すと楓は安心したような笑みを浮かべてくれた――

――――――――――――――――昨日はあの後家に帰ると楓は

すぐに眠ってしまった
1日の疲れがたまっていたのだろう、だから今朝も俺が起きても起きなかった。
今日ばかりは起きていないことが幸いだった、正直、なんて言って、どんな顔して別れればいいのかわからなかったからな
そうこうしていると目的の喫茶店の目の前まで来ていた
中に入って店内を見渡すと朝ということもあってあまり人の姿はない
あの男の姿も見えないからまだきていないのだろう　、先に二人分の席を確保しておくことにする
店員に案内された後コーヒーを頼み席に座って待つ
しばらくして店員がトレーにコーヒーを乗せてやってきて俺の前に置くと頭を下げて去っていく、時間を確認すると約束の五分前。そろそろ来てもいい頃だが――――――――
カランカラン
店の扉につけられた鐘がなる、扉の方に視線を向けるとあの男が立っていた
店の中を見回す仕草をした後俺と目が合う、そのままこちらに歩いてくると乱暴に椅子に座る
「遅れずに来てるとはえらいじゃねえか」
「あいにく時間は守る主義なんだ」
一言目から小馬鹿にするようなことを言われムッとする感情を抑えこちらもかえす
「ハッ、そいつはいい心がけだ。せいぜい忘れないことだな」
そう言うとそいつは注文をすべく店員に声をかける、「紅茶をもらえるか」そう短く済ませるとこちらに向き直って口を開く
「さて、俺も暇じゃない。話を始めようか、まずはお前がどこで楓と会ったのかを聞かせてもらおう」
上からな発言に辟易としつつも俺と楓の出会ったときのことや楓の家のことを話してもらったことなどをかいつまんで話していく
俺が話し終えると男は短く「なるほどな」とだけ言うとすでにテー

ブル置かれていた紅茶に口をつける
「・・・・・それで、あんたは楓を連れ戻しに来たんだろ」
「ん？　ああ、最初はそうだったんだがな。――――――――気が変わった」
「どういうことだ？」
「そのまんまの意味だよ、気が変わったから連れ戻す気は無いってことだ。むしろ今のままお前に預けっぱなしにしておきたいまであるな」
　冗談を言っているのか？そう思ったが男の目は嘘を言っていない、つまり
「本気で言っているのか」
「本気さ、それに俺は近々海外に転勤することが決まっていてな。あいつだって見ず知らずの土地よりもここに残った方がいいだろう？」
　そう言って笑いかけてくる男は側から見れば娘のことを考える父親だろう
――――――――側から見れば、だが
「・・・・・本心を言えよ、そんな御託を聞きにきたんじゃない」
　睨みつけるように視線を送ると男はこちらを嘲笑うようにこちらを見返してくる
「そう睨むなって、お互い悪い話じゃないだろ？　お前は俺にあいつを渡したくない、俺はあいつを手放したい。ほら、利害は一致しているじゃないか」
　そう言いきる男には悪いと思っている様子はない
　その姿を見た俺は言いきれない憤りを感じ椅子を蹴る勢いで立ち上がると男の襟首を掴む
「お前はッ！　あの子の父親だろ、どうしてそんなことが言える！」
　掴みかかってきた俺を怪訝な目で見ていた男は1人納得したように声を出す
「――――――――ああ、なるほどな。お前は知らないんだったか」
「・・・・・なんのことだ」
「いやなに、あいつが知らないことをお前に話せるわけがないよな」

「だから、何の話をして――――――――」
「俺はな、あいつの〝本当の父親〟じゃないんだよ」
「――――――――は？」
唐突に明かされた話に固まった俺の腕を引き剥がすと、男は椅子に座りなおし
紅茶を一口飲んでから語り始めた
「あいつの本当の父親はあいつがまだあの女の腹のなかにいる頃に雲隠れしてな、以来行方不明だ。あの女も最初は1人で育てて行くつもりだったらしいが結局は不安に負けて俺に父親になってくれないかって言ってきた。あの女は今で言う元カノ、元カレって関係でな、頼るにはうってつけだったんだろうよ。
もちろん断ろうと思ったさ、だがあいつが高校を卒業したら離婚してくれて構わない、お金も払うって言ってきてな。悪くない話だ、そう思ったさ。
その条件で俺はあいつの父親代わりになったんだ
それなのにあの女は、あいつが中学に上がる間近になって急に
『もう辛いから分かれてほしい、子供もあなたが引き取って』
なんて言い出しやがった、俺が約束の事を口にしたら
『あなたのそう言うところが嫌なの、子育てだって私が今までやってきたんだからこれからはあなたがやるべきよ』
そんな意味のわからない理由で納得できるわけないのにな、その後はもうただの怒鳴り合い
裁判を起こすってとこまで話をされて結局俺があいつを引き取った
結局金ももらえずお荷物だけを背負わされた結果だよ、ったくついてねえ
もうわかっただろ、さっきお前は俺に父親なのにとか言ってたが。
俺はあいつの父親でもなんでもないんだよ、だからお前の意見は的外れだってことだ」
そこまで話すと男はもう一度紅茶に口をつける
「――――――――だいたいお前もなんだ、お前は俺にあいつのこと

を渡したくなかったんだろ？
　それなのに俺に父親としての役割は求めてくる。まるで気持ちが定まっていない、そんなんで一体俺に何を言うつもりだったんだ」
　俺は反論しようとして口を開くが、言葉は出てこなかった。あの男の言っていることは事実だとわかっているからだろう
　そんな俺の姿を見た男はフッと短く、嘲るように笑うと1人で話を続ける
「おれは明後日にはこの国を発つ、楓の荷物なんかは必要最低限のもの以外は捨てるがそれ以外はこの喫茶店に預けて行く。会いたくないなら明後日以降にでも取りに来い、学費なんかは俺から出すつもりはない、そのつもりだったと思うがお前1人でなんとかしろ」
　それだけ言うと男は小銭をテーブルに置くと店を後にしようとする
　何か言わなければ、そう思っても言葉は何も出てこない。そうしているうちに男は店を後にしていた
――――――――――――――俺は、最後まで、あいつに何も言い返せなかった

　どうやって帰ってきたのかはいまいち覚えていない、気がつけば住んでいるアパートに着いていた
　周りを見てみれば雨脚は小雨にまで弱まっている

考えることを拒否していた頭が稼働し始め、そして一番の問題を俺の目の前につき出してくる
――――――――俺は、楓にどんな顔をして会えばいいんだろうか
あれほど憤りを感じていたのにあの男の言うことに何も言い返せなかった
楓の悲しみを知っていたのにそれを理解させることができなかった
結果的に楓を守れただけで、俺は何もできていなかった
そんな俺が今更楓にどんな顔をして会いに行けばいい、なんて言えばいいんだ
そんなことを今更考えても答えは出ない、わかっていても止められなかった
そして階段を上がり通路に出ると
「――――――――雅紀！」
名前を呼ばれ反射的に顔を上げるとこちらに走ってくる楓の姿が目に入る
楓は走ってきた勢いを殺さずそのまま抱きついてくる
「・・・・・よかった・・・・・ちゃんと帰ってきてくれた」
そう言う楓の声は少し鼻声だった、泣かせてしまっただろうか
反射的に伸ばしかけていた手を止め、ゆっくりと楓の肩に置くと少し力を入れて引き離す
「・・・・・どうか、したの？」
楓は不思議そうな、その奥に少しの不安を孕んだ顔をしてこちらを覗き込んでくる
その顔を見たとき、俺の中で感情を抑えていた理性の壁が崩れ落ちる音が聞こえる気がした
「――――――――っ！　・・・・・ごめん、ごめんな楓」
「・・・・・え？」
膝から崩れ落ち、謝罪の言葉を口にする俺に楓は戸惑いを隠せないでいる
「・・・・・俺は、お前が幸せに暮らしていけるようにしてやりたかっ

た。その気持ちに偽りはないし今も変わってない。・・・・でも、俺は無力だ。今回はお前を守ってやれた、でもそれは結果論だ、過程に俺の力なんかは微塵も含まれちゃいない

あの男は飄々としていた、楓がこんなに悩んで悲しんでいたのに

アイツは簡単に楓のことを手放した、理由があるとはいえ、形上だけだったとはいえ自分の娘であるお前のことを

そのことに俺は、間違いなく怒っていたんだ。間違ってるって言わなきゃダメだったんだ、

――――――――――でも俺にはできなかった

アイツのしてきたことは間違いなく悪なのに、俺にはそれを正せなかった

正直、もう今となっては自信がないんだ

これからお前と一緒に暮らしていってもお前を幸せにできるのか

お前を守ってやることができるのか、って

なぁ、楓。お前は俺と過ごした毎日は楽しかったか、嫌じゃなかったか、辛くなかったか

――――――――――家に帰りたいと、思ったことはないか。

もしそう思ったことがあるなら、・・・・・ここを出て行っても構わない。代わりに育ててくれる人は俺が探すから心配しなくていい、家に帰りたいなら俺が話をつけてみる、だから――――――――」

ふわりと俺の頭を抱きしめる感覚がして俺の言葉が止められる

頭上から楓の諭すような、落ち着いた声で話しかけられる

「・・・・・ねえ、雅紀。一緒に出かけた日の前の夜、夕ご飯一緒に食べてる時に私が雅紀に言ったこと、覚えてる？

あの時私は、『私のことを真剣に考えてくれるのはすごく嬉しい、でもそれが雅紀の重荷になってるなら、それは私にとってすごく悲しいことなの』って言ったんだよ。

だから今雅紀がこんなに私のことを思っていてくれたって知れてとっても嬉しい

でも同時に、そのことで雅紀が苦しんでるってわかってすごく悲し

いって感じてる私もいる
私にできるならその悲しみを取り除いてあげたいって思う、だから言わせて
『私は今まで雅紀と一緒にいて、嫌だったことも、辛かったことも、家に帰りたいと思ったことも一度もない。毎日が楽しくて幸せに満ちてた。
――――――――――だから、これからも私といてください。これからも、私に幸せをください』
・・・・・ちょっとワガママだったかな、でもそれでいいって雅紀は言ってくれたし、
これくらいなら許してくれるよね？」
そう言って少し意地悪そうな笑みを浮かべる楓、その表情の裏にはどれだけの感情が渦巻いているんだろうか
「・・・・俺なんかでいいのか、こんな情けない俺でもそばにいてほしいって、そう言ってくれるのか」
俺の言葉に楓は困ったような、少し悲しいような表情をする
「雅紀は情けなくなんかないよ、だって私のためにこんなに悩んで、傷ついて、ボロボロになっても私との約束を守って帰ってきてくれた、とっても強くて優しい人だもの。
だからそんな悲しいこと言わないで？」
楓は俺の目を見てそう言いきる、その目には強い意志が宿っていた
「っ！　・・・・ごめんな、もうそんなこと言わない。いや、言わなくてもいいようにする。
お前を守って、幸せにできるだけの力をつけて。もうこんなことが起きないようにする
――――――――――ありがとな、楓。お前には助けられてばっかりだ」
「それはお互い様だよ、雅紀」
楓から離れて立ち上がり、感謝の言葉を言う俺に彼女も笑って返してくれる
――――――――――女の子にここまで言わせたんだ、もう

後には引けないな。
「――――――それじゃあ。これからもよろしくな、楓」
「うん。これからもよろしくね、雅紀」
俺の差し出した手に楓の小さな手が合わさる
雨はもう上がっていて、雲の隙間から太陽が顔をのぞかせていた

「そう・・・・・なんだ。あの人は私の本当のお父さんじゃ・・・・・」
部屋に帰った俺は悩んだ結果、楓に本当のことを伝えた。楓にはいずれ言わなければいけないことだと思ったからだが、やはりショックは大きいだろう
「楓、大丈夫か？」
「うん、ちょっとビックリしたけど。そんなにショックではなかったかな」
そう返してきた楓に俺は少なからず驚きを感じる、俺だったらそんなことは言えない
「・・・・・驚いたよ、やっぱり楓は強いな」
「アハハ、そんなんじゃないよ。・・・・・なんて言うのかな、女の勘？　って言うのかなやっぱり。それでなんとなくだけどそんな気がしてたのかもしれないね」
「・・・・・毎回思うが女の勘ってのは侮れないな」
麻衣の時もそう思った記憶があるし、やはり男にはわからない何か特別な力があるんじゃないかと疑ってしまう
「――――――そういえば、楓も喋り方が前とは変わったな」

前まではポツポツと喋っていく感じであまりテンポよく会話はしなかった
「うん、こっちが私の素の話し方・・・・なのかな？」
「どうしてそこで疑問形なんだ？」
「もう長いことあっちだったから、どっちか本当かわからなくなっちゃった」
「そんなもんか」
「――――――でも、多分あの話し方だったのは私の心が凍ってたから。それを雅紀が溶かしてくれたから戻れたんだと思う、やっぱり、雅紀には感謝してもしたりないね」
「なんだか改まって言われると照れくさいな」
「ふふ、照れなくてもいいのに」
そう言って笑う楓は本当に変わったと思う
以前はこんなに笑うことはなかったし話し方だって楽しそうに話す
表情も豊かになって全体的に雰囲気が明るくなった気がする
これが昔の楓だったのだろう、俺は昔の楓を知っているわけではないがそう言える
本当なら俺の力だけで成し遂げたかったが、素直に嬉しいと感じる
「？　どうしたの雅紀」
「いや、なんでもないよ。ただ、幸せだなって」
「？　いきなり何言うのかと思えば、変な雅紀」
そう言ってクスクスと笑う楓、本当に変わってよかったと思える光景だ
「――――――おっと、もうこんな時間か。楓、昼飯はどうする？って言っても今うちの冷蔵庫にはろくなもんがない気がするけど」
「うーん、せっかくだから何か豪華なものにしたいけど。それは夕ご飯にしよっか」
「じゃあ昼はカップ麺だな」
「・・・・私あれあんまり好きじゃないんだよね」
「そうは言ってもそれしかないんだから我慢しろよ、夕飯は・・・・・

すき焼きにでもするか」
「本当!?」
「あ、ああ。せっかくだしな」
目を輝かせてこちらに身を乗り出してくる楓から若干離れつつ答える
――――――――――――――なんか子供っぽくなってないか？確かに歳は俺から見たらまだ子供と言えるからいいのかもしれないが・・・・・・
「今雅紀失礼なこと考えなかった？」
「・・・・・・女の勘ってのも案外外れるもんだな」
・・・・・・こんなに勘が鋭い女子は俺の周りだけだと信じたい

あの後楓からの追求を逃れた俺は家を出てバスに揺られながら目的地に向かっている
雨が上がって少ししたが傘を手に持っている人が目立つ、相変わらず中は混んでいた
目的地の大学前に着くとバスを降りキャンパス内へと向かう
敷地の真ん中あたりまで来てから一旦立ち止まり辺りを見回す
「さて、いつものあいつならすぐに来ると思うんだが――――――――」
「あれー？　先輩何してるんですか、しかも手ぶらで」
「――――――――やっぱりお前はいつもタイミングがいいな」
「え？　そうですかね？」
自覚がなかったことに苦笑いしつつ早速話を切り出す

「お前、次講義入ってるか？」
「えーっとそうですね、でもどうしてそんなこと？」
「ふむ、お前単位の方は問題ないよな」
「え、ええ」
「なら俺に少し付き合ってくれないか、次の講義はサボって」
「うーん、それはいいんですけど。いったい何を？」
「お前には話しといた方が後々良さそうだと思ってな、楓のことなんだ」
「楓ちゃんがどうかしたんですか？」
「それを話そうと思ってるんだよ、とりあえず場所を変えよう」
俺は麻衣を連れてキャンパス内の食堂を目指した

「楓ちゃんにそんな過去があったなんて・・・・・」
「ああ、でもだからって接し方を変えたりはしないでもらえるか。そっちの方が楓も気が楽だろうし」
「ええ、わかりました」
あの後食堂に着くと端の席を確保して俺と楓の出会った頃の話や、楓の家のことなどを簡単にまとめて話した
流石に父親が違うことなんかは伏せたがそれ以外のことは話しておいた
「・・・・それで、どうしてこのことを私に？」
「お前は楓と仲がいいし俺ともそれなりに関係が深いからな、いざって時に、そうじゃなくても手を貸してもらいたかったんだ。それにお前はこういうことには口が硬いだろ？」
「・・・・わかりました。それに、ここで断れるほど私も人でなしではないですからね」
「お前ならそう言ってくれると思ってたよ。それじゃ、これからもよろしくな」
「ええ、よろしくです。――――――――――ところで先輩、秘密は

お互いの中をより深くするって話は知ってますか？」
「？　いや、初めて聞いたが」
「さっき先輩は『俺ともそれなりに関係が深いからな』と言っていましたが、秘密を共有した私たちの関係は今どの程度のものなんでしょうか？参考までに是非教えてくださいよ」
　そう言ってくる麻衣の顔は完全に俺をからかっている時のそれだった
「・・・・・お前、その口調になっても俺をからかう癖は無くならないんだな」
「当たり前ですよ、だって楽しいですもん。で、私の問いへの答えはもらえないんですか？」
「・・・・・・・・・・ノーコメントだ」
「ふふふ、先輩照れてるんですか～？可愛いとこあるじゃないですか」
　完全に遊ばれていると分かっていても、どうしようもない現状に俺は大きなため息をついたのだった

　あの後しばらく麻衣と話していたが彼女の次の講義の時間ということでお開きになった
　麻衣と別れた後大学をあとにした俺は夕飯の材料を買うべくスーパーに寄ってから家に帰った
「ただいま」
「――――――おかえりなさい！」
　俺の言葉に少し遅れて楓の声が帰ってくる
「すき焼きの材料ちゃんと買ってきた？」
「おう、当たり前だろ」
　俺は買ってきた食材を台所に持っていくと材料を並べる
　牛肉、ネギ、シラタキ、豆腐、白菜、春菊、卵、牛脂
「うん、材料はバッチリだね」

材料の確認をしていた楓は満足げに頷くとこちらを向いて
「どうする？　ちょっと早いけどもう作っちゃう？」
「うーん、そうだな。ちょっと早い気もするけど遅いよりかはいいだろうし、作り始めるか」
「わかった、でも私すき焼きなんて作ったことないよ」
「んー、まあ調べてから作れば失敗はしないだろ。それに料理は直感だぞ」
「・・・・すごい失敗しそうな人の意見だね」
なんだろう、今さりげなく言葉に棘があった気がする
だが実際それでわりかし上手くいくし失敗することも少ないのだが・・・・
「まあいいや、レシピはネットで調べて。それを見ながら作ろっか」
「あ、ああ。そうだな」
――――やっぱりレシピは見た方がいいのか？

1時間後
「・・・・ねえ、雅紀。私の言いたいこと、わかるよね？」
「・・・・・・」
「私言ったよね？『レシピを見ながら作ろう』って」
「・・・・・・」
「なのにどうしてレシピを見ないで作って、結果的に失敗してるの？」
「い、いやでも。見た目は確かにあれだが味は問題なかったぞ？　ほら」
「そういうことは言ってないの！　結果的に良くなっただけよかったと思いなさい！」
「・・・・すみませんでした」
現在俺は床に正座させられ楓からお叱りを受けている、原因は食卓に置かれているすき焼き（仮称）だ
俺たちは役割を分担して作っていたのだが、途中から俺がレシピを

見るのが面倒になって大雑把な記憶と直感を頼りに作った結果
・・・・・その、なんだ、色が少し、ほんの少しだけだが黒くなってしまったというわけだ
味はさっきも言ったとおり問題はなかったのだが
「はあ、どうしたらすき焼きが〝真っ黒〟になるの・・・・」
「あーいや、その、なんだ。・・・・・冷める前に食べないか?」
結局俺は逃げに走った、正直この状況はひっくり返せる気がしない
楓は俺のことを少し睨むと
「・・・・・次からはきちんと〝レシピ通りに〟作ってね」
とだけいうと席についてくれた
「お、おう。勿論だ」

結局そのすき焼きを一番食べたのは文句を言っていた楓だったのは言っておくべきだろう

七日目

「それじゃ、行ってきます」
「行ってらっしゃい、ちゃんと間に合うように帰ってきてね」
「わかってるよ」
朝、楓に見送られて家を出る。今日は一日大学にいる日なのだが同時に楓と行く約束をした
『雨神祭り』が催される日でもある
今日の天気は快晴、この前までの雨が嘘のように空は晴れわたっている
天気予報でも今日一日晴れが続くと言っていたから中止の心配はしなくてもいいだろう
――――――――――楓が楽しみにしていたのだから雨が降ったら天を恨んでいたが

「――――――――――つまり、これは全ての事象の説明として成り立っていると書かれているわけです。・・・・・・少し早いですが本日はここまでとします」
その声と同時に室内に喧騒が戻ってくる
早々に席を立ってどこかへ行くものや隣の席の人と話をするものなど様々だ
俺は時計を確認すると席を立ち食堂に向かうことにした

「やっぱり混んでるな・・・・・」
先に席を確保しておくべきだったかと後悔しながら歩き回り、入り口からは柱で見えにくい場所に空いている席を見つけそこに座る
今日はキツネうどんだ、タヌキも好きだが個人的には汁を吸った油

揚げが好きだからキツネを頼む時の方が多い気がする
「あ、先輩こんにちは。今日はキツネうどんなんですね」
「――――――――お前ひょっとして俺のこと見張ってたりするのか？」
ここは入り口からは見えにくいからたまたま見かけたなんてことはないはずだが・・・・・
そんな俺の疑いの言葉を聞いた麻衣は
「見張る？　先輩何かしたんですか？」
「・・・・・いや、なんでもない。お前も席探してたんだろ、そこ空いてるぞ」
「本当ですか？　――――――でも先輩が私を誘ってくれるなんてどういう風の吹き回しで？」
「・・・・・・前のお前だったら誘わなかったよ」
「なら戻して大正解でしたね」
何が正解なのかと聞こうと思ったが本人は嬉しそうに笑っているのでやめておくことにした
麻衣の前にはミートスパゲッティとサラダが置かれている
なにかとソースが跳ねて服を汚しがちだが麻衣はフォークとスプーンを使ってうまく食べていく
じっと見ているとまた何か言われそうなので、視線を自分のうどんに戻し少し冷めたうどんを口に運んでから油揚げを一口かじる
――――――――うん、うまい
そのまましばらく無言でお互い食べ進めていく
その沈黙を破ったのは麻衣の方だった
「そういえば先輩、今楓ちゃんと一緒に暮らしてるんですよね」
「・・・・・今も何も一週間前からそうだが」
「そうですけど、でも先輩のお家ってそんなに大きいんですか？」
「？どうしてそう思った」
「だって楓ちゃん女の子なんですから、１人の部屋ぐらいあるんですよね？　それを用意できるぐらい大きいのかなって」
「・・・・・・・・」

俺は思わず固まってしまう、今麻衣に言われて始めて問題点に気づいた
今はまだ意識するほどではないが楓はこれから第二次性徴期にはいるだろう
知らないかもしれない奴のためにわかりやすくいうと、主に体において変化が生じ、男子は男子らしく、女子は女子らしくなっていく時期だ
それに思春期だってもうすぐのはず、つまり――――――――――――

「まさか先輩、一緒の部屋なんてこと。ないですよね？」
「・・・・・・・そのまさかだよ」
「・・・・・・・・先輩」
「わかってる、何も言うな」
引っ越し、しないとダメだな――――――――――――
俺の中で引っ越しは重要事項として保存された瞬間だった

「先輩、私、気づいちゃったんです」
「おう、なんだ急に」
あの後麻衣から小言を長々と言われながらうどんを食べきった俺は食後の休憩がてらお茶を飲んでいた、ちなみに小言を言っていた彼女はまだ食べきっていない
「先輩、今まで私が挨拶してもちゃんと返してくれたことありませんよね」
「いやいや、そんなわけ――――――――――――」
そう言いながら俺は過去に麻衣と会ったときのことを思い出していく
『先輩とは講義の時間が被ってるせいであんまり会えなくて寂しかったんですよ～？　もちろん先輩も私に会いたかったですよね？』

『・・・・・・お前、誰にでもそんなことしてんのか？』
『あれ～？　先輩じゃないですか、一昨日ぶりですね～』
『・・・・・』
『ちょっと～無視しないでくださいよ～』
『あ、センパ～イ！　早いですね～』
『あいにく人を待たせるのは嫌いな性格でな』
『あれー？　先輩何してるんですか、しかも手ぶらで』
『――――――やっぱりお前はいつもタイミングがいいな』
『あ、先輩こんにちは。今日はキツネうどんなんですね』
『――――――――――お前ひょっとして俺のこと見張ってたりするのか？』

いや、うん。確かに言ってないかもしれない
「――――――――――そんなわけないだろ。気のせいだ」
何故だか急に後ろめたい気分にかられて思わず目をそらしてしまう
「・・・・・先輩、それ私の目を見てもう一回言ってくれませんか？」
「・・・・・・」
「どうしたんですか？　先輩」
何故だろう、見えていないのに今の彼女は末恐ろしい顔をしているのがわかる
「・・・・・・・・・わかった、悪かったよ」
俺は両手を上にあげ降参のポーズをとると麻衣の方に向き直る
一瞬だけ見た顔は驚くほど無表情だった、怒ってるより遥かに怖いからやめてもらいたい
そんな顔も一瞬で笑顔に変えた麻衣の表情筋の柔らかさに驚きつつ話に耳を傾ける
「いえいえ、別に挨拶を返して欲しかったわけではないんですよ。それなりにあの挨拶も楽しかったですし。でも先輩が謝ってくれるなんて意外でしたねー、それに『悪かった』まで言ってくれるなんて。これはもう謝罪のために私のお願いを聞いてくれるって事で問題ない

んですよね？」
麻衣はそう早口でまくしたてると期待の目でこちらを覗き込んでくる
「いや待て、その理屈はおかし――――――――」
「そうですか聞いてくれるんですね!?　やっぱり先輩は優しいですね～」
「――――――――――――――――ハァ、わかったよ。で？　そのお願いってのは？」
結局は彼女の圧に負けて了承した俺を見て小さくガッツポーズをする麻衣を横目にお願いの内容を訪ねておく
「言っとくけど無理なもんだったら断るからな」
「そんな大した事じゃないですよ。・・・・えっと・・・・その」
「・・・・・」
「こ、今度の日曜日。私と出かけませんか！」
「・・・・出かけるだけでいいのか？」
「はい！　・・・・・ダメ、ですか？」
「いや、そんな事でいいなら付き合うさ。どこに行きたいとかあるのか？」
「あ、えっと。最近近くにできた新しい遊園地があるんですけど」
「なるほどな、じゃあそこにするか」
「はい！」
麻衣はなにがそんなに嬉しかったのかと思うほど顔を綻ばせている
しかし遊園地か、もう長いこと行ってないな。最後は確か中学の卒業旅行だったか
あの時のことはもうほとんど記憶の彼方に行ってしまって思い出せる方が少ないかもしれない
誰かが言っていたな、『大人になるというのは様々なものを忘れ、捨てていくことだ』と
俺だっていろんなものを手放してきたが未だに大人になれたかはわからない

つい昨日に力のなさを思い知った身としてはまだまだなのだろう
――――――――――この歳になって、大人になりたいと思うとはな
「――――――――――っていうのがこの遊園地の特徴なんですけど。・・・・・先輩ちゃんと聞いてくれてますか？」
「え？ああ、すまん聞いてなかった」
「もー、せっかく説明してあげてるんですからちゃんと聞いてくださいよー」
「悪い悪い、今度はちゃんと聞くから」
物思いにふけっている間に麻衣から遊園地についてのレクチャーが始まっていたらしい
俺は今までの思考を頭の隅に追いやり、麻衣の話を聞くことに集中することにした

「――――――――――――――――――――少し時間を超えてしまいましたが、本日はこれで終わろうと思います。お疲れ様でした」
教授の終了の言葉を聞くと同時に俺は席から立ち上がり講義室を早足であとにする
時計の針はすでに七時半を指そうとしている、このままでは約束の時間に遅れかねない
発車寸前のバスに駆け込み運転手から注意されるもなんとか間に合うかもしれない時間のバスには乗れた
空いている席に座って乱れた息を整えておく
息も落ち着き、あたりを確認すると降りるバス停のすぐ近くなこと

に気づいて慌てて降車ボタンに手を伸ばす
ポーン　　聞き慣れた電子音の後停車アナウンスが流れる
バスがゆっくりと止まりドアが開く、降りるのは俺だけだったようですぐにドアは閉まると
またゆっくりと発進していく
「今の時間は・・・・・あー、これはちょっと遅れるな」
時計の長針はすでに11と12の間、どんなに急いでも間に合いそうにない
それでも小走りで家に向かう、道中神社の前の道ではすでに屋台が開いておりそれなりに人が集まり始めている
「これは楓に文句言われそうだな」
人混みを抜けながら1人呟く、思わず怒っている楓を想像して苦笑いが漏れた

家の前は祭りの喧騒など関係なくいつもの静けさを保っていた
階段を登り廊下を進んで部屋の前に着くと鍵を取り出して扉を開ける
「おーそーいー!!」
扉を開けるや否や聞こえてくる楓の声に苦笑いしつつ軽く謝っておく
「ハハ、悪かったよ。少し講義が長引いてたんだ」
「もー、お祭り始まっちゃってるじゃん」
「始まったばっかりだから今から行っても十分だと思うんだが」
「わかってないなー、こういうのは始まった時にはそこにいるのが普通なんだよ」
そんなもんだっただろうか?少なくとも俺は違ったが・・・・・
「ほらほら、そこで立ってないで早く行こ?」
「ああ悪いけどちょっと待っててくれ、荷物置いてくるから」
俺は部屋に教材のつまったバックを下ろすと中からスマホと財布

を取り出す
財布の中を確認して現金が十分なのを確認してからポッケに入れ戸締りを確認してから
外で待っていた楓のところに行く
「もういいの？」
「ああ、多分大丈夫だろ」
「じゃあ早く行こ！」
俺の手を握って走り出す楓に引っ張られながら神社へと向かう
楓はこの前麻衣に選んでもらった服を着ている、意外と気に入っているのだろう
「あんまり走ってると転ぶぞ」
「大丈夫ー」

「わぁ、結構大きいんだね」
「そうだな、俺もこんなに大きいとは思ってなかったよ。もしかしたらここら辺で一番かもしれないな」
神社へと続く道路の端には数多くの屋台が軒を連ねている、始まりの部分には警察官が立っていて車両通行禁止を知らせている、俗にいう歩行者天国だ
道には多くの人が集まっていて気を抜くとはぐれてしまいそうになるぐらいだ
「――――――じゃあ行くか。楓、手出してくれるか」
「？いいけど」
不思議そうにしつつも差し出された小さな手を優しく、しっかりと握る
「この人混みだと、はぐれたりしたら探すの大変だろ？」
「う、うん。そうだね」
そう頷く楓の頬はほんのりと赤い
人混みとはいえ多少は手を繋ぐことが恥ずかしいのだろう、俺も少

しはそう思うがはぐれないようにする方が大切だ
今度は俺が楓を引っ張る形で祭りへと加わっていった

「あ！　あれ食べたい！」
「ん？　どれだ」
「あれあれ、あのりんご飴って名前の」
「おお、ここにはりんご飴あるのか。最近見かけなくなってたのにな」
そう言いつつ店主にお金を渡してりんご飴を二つ頼む
「はいおまちどうさん。兄妹仲が良くていいねぇ」
りんご飴を渡しながらそう話しかけてくる店主の言葉に曖昧な笑いを返しつつ楓に手渡す
「ほら、これ楓の分」
「ん、ありがとう。・・・・・・兄妹かぁ」
「・・・・・どうかしたか？」
「ううん、なんでもないよ。――――――あっ！　あれも見たい」
楓の歩き出した先にあったのは射的の屋台だった
的にはエアガンやぬいぐるみ、お菓子に小物など雑多な印象を感じさせる品揃えだ
「何か欲しいものあったのか？」
「・・・・・あのヘアピン、可愛い」
楓の先には水色のピンに白の花飾りが付いている髪留めがあった
確かに可愛いデザインだし今きている服にも似合いそうだ
「欲しいのか？」
「うん、でも私こういうのやったことないからきっと取れないし。いいよ」
「――――――――――おじさん、一回分な」
「え？」
「おう！　一回分なら弾は五発だぞ、しっかり狙えよな！」
元気のいいおじさんから弾と銃を受け取り、しっかりと弾を込めてから狙いをつける

最初はまっすぐ飛ぶことを想定して狙って撃つ、弾は当然勢いが足りずやや左下のとことに落ちる
今度はそれを考慮して少し右上を狙って撃ってみる、今度は上すぎたのか的の上を通ってしまう
少しだけ狙いを下にずらしてもう一度、すると――――――
パスン
と軽い音とともに的に弾が当たり倒れる、俺が心の中で小さくガッツポーズをしていると
「おぉ！　兄ちゃんやるなぁ！　・・・・・ほら、もう一個はオマケだ！受け取ってくれや」
店主が商品ともう一つ、同じデザインの黒に赤の花飾りが付いているものもくれる
「いいんですか？」
「おう、久しぶりにいいもん見れたしな。あと二発残ってるけどどうするよ？」
「そうですね、せっかくだから大きいのでも狙ってみることにします」
「兄ちゃんにでかいの持ってかれたらこっちは困っちまいそうだな」
そう言って笑う店主の気前の良さに感謝しつつ俺は大物、クマのぬいぐるみに狙いを定めた

「また来てくれよな！」
「ええ、また来年にでも」
結局クマは取れなかったがお目当てのものは取れた、楓に渡そうとすると
「雅紀、射的上手だったんだね」
驚いた表情でそう言われた、そんな楓に髪留めを渡しつつ話に乗る
「別にそこまででもないがな、今回はたまたまだよ」
「――――――――これ」
「ん？　ああ、それ、欲しかったんだろ」
「・・・・・うん、大事にするね」

嬉しそうに笑った楓は水色のピンを使って前髪をとめてみせる
「どう・・・・かな？」
「・・・・・うん、よく似合ってるな」
「えへへ、ありがと」
褒められたことが嬉しかったのか照れくさそうに笑う楓、俺はその手を掴んで
「まだ回るんだろ？」
「もちろん、まだまだ楽しまないと」
そういって張り切る楓を見ていると、自然と俺の口元には笑みが浮かんでいた

「あー楽しかった」
「それなら俺も良かったよ」
あのあと2人で多くの屋台を回った。食べ物の屋台はもちろん輪投げ、クジ引きなんかの遊びメインの屋台なんかも多く行った
「でも楓がクジで三等を引き当てたときは驚いたよ、あれって当たるもんなんだな」
「ふふん、結構私って運がいいのかもしれないね」
そう、あのあと楓はクジで三等の『花火セット』を引いていた
俺たちはそれをするために、コンビニでライターと小さいバケツを買って近くの公園を目指しているところというわけだ
「――――――あっ、ここが雅紀の言ってた公園？」
「そうだな、俺は水汲んでくるから楓は花火の準備しといてくれるか」
「うん、わかった」
俺はバケツに水を多めに入れてから蛇口をひねって止める
ズッシリとくる重さを感じながら楓のところに戻ると、袋を開けて準備万端と言った表情だ
「――――――それじゃ、始めるか」

俺は楓の持っている花火に火をつける
紙の中の火薬に火がつき赤い光と火花を散らしながら周囲をぼんやりと明るくする
俺もすぐに袋から別の花火を取り出して楓のから火を分けてもらう
俺のは緑の光を放ちながら輝いている
「・・・・・きれい」
そう呟いた楓の顔は花火の光に照らされてどこか幻想的な雰囲気を醸し出していた
それからは片方の花火が力つきると新しいのを出して、まだ火がついている花火に分けてもらう
それを繰り返して順調に本数を消化していった
打ち上げ花火もあったがこれは近所迷惑になったりするからまた今度ということになっている

そしてやはり最後に残る花火といえば線香花火だろう
俺たちはゆっくりとそれを眺めていた
「・・・・・やっぱり線香花火はきれいだね」
「・・・・・そうだな、他にはない味がある気がする」
お互いこれが最後の一本ということもあって線香花火の火を落とさないように手元をじっと見つめている
「あっ、・・・・・落ちちゃった」
「俺のはまだもちそうだな」
手元が震えないように慎重に持っているせいか少し手が痛くなってきたがここで落としたくはない
そんな意地で保っていると
「・・・・・ねえ、雅紀。私がプレゼントした花の名前、覚えてる？」
「えーっと確か『リナリア』だっけか。それがどうかしたのか？」
「・・・・・そのリナリアの花言葉は、知ってる？」

「あーいや、花言葉はほとんど知らないからな。どんな意味なんだ？」
「・・・・・リナリアの花言葉は　　『私の恋に気づいて』」
「・・・・・・え」
楓の言葉に手が震えポトリと線香花火の火は落ちてしまう
だがそんなことは俺の意識にはなく、ただこちらを見つめる楓の目にのみ意識は向いていた
楓はゆっくりと口を開くと、決定的な言葉を口にする
「・・・・・私は、雅紀のことが好き。・・・・・家族や友達に抱くような好きじゃなくて、私は恋人として、雅紀のことが好き」
楓の目には強い気持ちが宿っている、しっかりと俺の目を見て俺の答えを望んでいる
「――――――――――雅紀は、私のこと、好き？」
「・・・・・・・・」
――――――――――正直なことを言えば、素直に嬉しい
女の子から好意を向けられて嫌な男はいないだろう
・・・・・・でも、今回はそんな気持ちで決めていいものじゃない。
――――――――――それに俺の答えはもう決まっている
「――――――――――楓、お前はまだ中学2年だ。これから中学、高校、大学、全部でまだ9年も人と出会う機会がある。その中できっと俺よりも好きなやつはできる、でもその時に俺と付き合ってたら楓はどうするんだ？　・・・・・だから今のいっときの感情に流されるな、もっと長い、これから先のことを考えて――――――――――」
「私のっ、好きな人は雅紀だけ。これからだってそれが変わることなんてない」
食い気味にそう返す楓、引く気はないと目が訴えている
「・・・・・・・・わかった、そこまで言うなら一つ約束をしよう」
「・・・・・約束？」
「お前が大学を卒業するまでに、俺以外に好きなやつや気になるやつが1人もできなかったなら。――――――――――その時は

俺がお前をもらってやる」
「そんなことしなくても――――――――」
「悪いが、こればっかりは譲れない。俺はお前を幸せにしたいんだ、その俺がお前の枷になりたくはないんだよ。わかってくれ」
「・・・・・・・・・・・・」
　楓は俯いて黙ってしまう、だがこちらも引くわけにはいかない大げさかもしれないがこれは楓の人生を左右することなのだから
「・・・・・・・・雅紀と付き合うことが、私の幸せだって言っても？」
「ああ、お前がそう言っても俺は意見を変えるつもりはない」
「・・・・・・約束、忘れないでね」
「ああ」
「・・・・・・約束、ちゃんと守ってね」
「勿論だ」
「・・・・・・なら、今はまだ我慢する」
「・・・・・・ありがとう」
「でも、今我慢する代わりに。このくらいはいいよね」
「え――――――」
　俺の唇に柔らかい感触が触れすぐ目の前には瞳を閉じた楓の顔がある
　互いの息がかかるほど近く、それでいて不思議と嫌な気分じゃなかった
「・・・・・・ふぅ」
　一体どれくらいそうしていたのかわからなかったが気がつけば楓は俺から離れていた
「ふふ、これ私のファーストキスだったんだよ」
　いたずらな笑みを浮かべる楓に思わずため息が出てくる
「ハァ。お前なぁ。まったく、これからお前がどうなるのか楽しみだけど不安だよ」
「楽しみに待っててていいよ、絶対に可愛くなって私のことふったの後悔させるんだから」
「別にふったわけじゃないだろ、先延ばしにしたんだよ」

「女からしたらそんなの一緒だよ、――――――――――女は執念深いんだから」
「女の執念深さなんてもう知ってるよ、・・・・・・頑張って俺を後悔させてみろよ」
「もちろん、雅紀も私以外に浮気しないでね」
「浮気も何も、そもそも付き合ってないだろ」
花火をバケツに入れ持ち上げる、さっきよりも重い気がするのは気苦労が増えたからだろう
「花火も終わったし、早く帰るぞ」
「うん・・・・・・ね、手繋いでもいい？」
上目遣いで楓がそう尋ねてくる
「・・・・・・毎回こんなに甘えられるとは、思わないでくれよ」
そう言って左手を伸ばすと小さな楓の手が握りしめてくる
いつもより繋いだ手が熱い気がしたのは、きっと気のせいだろう
――――――――――俺の心臓がこんなにうるさいのも、きっと気のせいに違いない

終

ＯＶＡ　高槻　美祐の秘密の恋

私は今、恋をしている
「あ、美祐～！」
「楓！　こっちこっち」
でもその恋は、普通とはちょっと違う。でもこれは――――――――――――
「ごめんごめん、電車乗り間違えちゃって」
「も～、しょうがないなぁ。今回だけだよ？」
――――――――紛れもなく、『恋』なんだと思う

大学の夏休みは今までと違ってとても長い。それこそ、なんでも出来るぐらいに
でも大体の学生はその休みを、バイトや遊びで使い果たしているんじゃないかと思う
かく言う私も、その休みを友人との約束のために遊園地に使っているのだけど
「・・・・・楓、遅いなぁ」
その待ち合わせ相手の名前は　三枝　楓
大学の授業で知り合って以来、学外でも会うぐらい仲良くなっている
楓もきっと私のことを『友達』だと思ってくれていると思う、けど私は――――――――
「あ、美祐～！」
少し離れたところから名前を呼ばれ、そちらに顔を向ければ
手を振りながら駆け足で向かってくる楓の姿があった、相変わらず白い服が似合っている
「楓！　こっちこっち」

相手が分かっているのを知っていても、こうして呼びかけてしまうのは女子のさがなのかなぁ
そんなことを考えているうちに楓はすぐそこまで来ていた
「ごめんごめん、電車乗り間違えちゃって」
そう言ってばつが悪そうに笑う楓の笑顔は、夏の日差しに負けないぐらい眩しく見えた
「も～、しょうがないなぁ。今回だけだよ？」
私が呆れたように返すと「さすが美祐、優しいな～」なんて返してくる
「はいはい、そんなこと言ってないで早く中入ろ」
「うん、・・・・・はい、これ美祐の分のチケットね」
「ありがと」
差し出されたチケットを取るとき、私の指と彼女の指が少しだけ触れる
そんな些細なことでも私の心臓はドキドキとしてしまい、バレちゃうんじゃないかと不安になる
出来るだけ平静を装ってチケットを受け取りポケットにしまう
「遊園地楽しみだね」
「う、うん。そうだね」
楓との時間は幸せのはずなのに、隠さなきゃいけないって意識すると――――――少し辛い

私は高校まで好きな人ができたことがなかった、別に男性が嫌いだった訳じゃない。少なかったけど男の友達だっていた。
私はレズなのだろうか、そう思った時もあったけど女の子で好きになる子もいなかった。
私には出会いがなかっただけ。そう思うことにして日々を過ごしていた私の前に楓が現れたのは、大学に入ったばかりの四月のことだった。

気まぐれで取った授業で、たまたま席が隣だった子。そんな印象しかなかった私に彼女は
『私、楓って言うの。その・・・・私と友達になってくれない？』
恥ずかしそうに話す彼女に対して私は、積極的な子だな、ぐらいしか思わなかった
別に断る理由もないと思い、二つ返事で頷いた私に彼女は驚いた表情をしていたが。すぐに嬉しそうに笑って
『ありがとう！』
そう言ってきた。
その笑顔を見た時、私の心がキュッと締め付けられる感覚がした
思い返してみれば、私が彼女に『恋』をしたのはこの時だったのだろう
それから私達はいろんな話をした。何が好きで、何が嫌いで、何で喜んで、何で悲しんで。
どんな人が苦手で、・・・・・・好きなのか

――――――――――――――――――――ある時、楓は私に雅紀という人の話をしてきたことがあった。
そのとき彼女からハッキリと好きだと言われたわけではない。でも彼女の目は全てを物語っていた、『彼のことが好きだ』と。私は目の前が真っ暗になる感覚がして、ちょっと体調が悪いから、そう言って早々に別れた。その時の彼女の前にいるのは、私には無理だった
当たり前だ、私の好きな人にはすでに、好きな人がいたのだから。

その事実を知った次の日、私は季節外れの風邪をひいて寝込んでしまった
熱にうなされながら自分の不幸を恨んだ、恨んで恨んで恨んで恨んで
最後には顔も知らない雅紀という人物に妬み嫉みの負の感情を積もらせている自分がいた

そんな私が最終的に出した結論は、情けないことに僅かな希望にすがることだった
『楓がもしかしたら、万が一でも、私を好きになってくれることがあるかもしれない』
そんなありもしない希望にすがることでしか、私は私を保てなかったのだ・・・・・・

「美祐、どうかしたの？　また調子悪い？」
「へ？　あ、ううん。大丈夫、ゴメンね心配させちゃって」
「それはいいけど・・・・・何か悩み事？」
楓は心配したように私の顔を覗き込んでくる、この優しさも彼女の美点の一つなのだが
――――――あなたのことで悩んでたの。・・・・なんて、言えないよね
「ううん。本当に大丈夫だから、心配しないで」
「そう、でも困ったことがあったらちゃんと言ってね？　力になるから」
楓の優しさが、私の心の傷口にしみる。つい、本当のことを言ってしまいそうになる
でもそれは出来ない。そんな事をすればきっと、この関係はあっけなく崩れてしまうから
「あ、やっと順番回ってきたね。ジェットコースターなんて久しぶりだなぁ」
「私も、遊園地なんて一人じゃ来ないもんね」
でももし、そんな事を気にせず。自分の気持ちを伝えられたなら、

それは――――――

『走行中は安全バーをしっかりと握って、手はあげないようにお願いしますね～。

それじゃあ、スリリングな旅へ。行ってらっしゃ～い』

――――ううん、今はこの事を考えるのはやめよう。せっかくの時間を楽しまないとね

「どどうしよう。思ってたよりも怖いかも」

「あはは、楓怖がりすぎだよ」

ゆっくりとその車体を高所に上げていくジェットコースター、この独特の時間もまた

人気に一役買っているのかもしれない

「そんなこと言ったて、あーもう落ちちゃう！　ねえ美祐、手握ってもいい？」

「う、うん。構わないけど」

私が言い終わるよりも早く、楓の手が私の手に重なる

その瞬間、私の心臓が早鐘のように鳴り響く。ドキドキとうるさい心臓の鼓動を必死に落ち付けようとしているうちに、もう目の前まで落ちる場所が迫っていた

「「キャアアアア!!」」

他の人たちの楽しさと怖さの混じり合った悲鳴が聞こえる。確かにこれは他のよりも少しばかり怖い気がする

でも今の私にはジェットコースターよりも、怖さからかさっきよりもギュッと握りしめてくる

楓の手の感触の方が心臓に悪かった。

周りの景色よりも楓の表情にばかり目がいってしまう

私が楓の顔ばかり見ていることに拗ねたのか、車体が一際大きく揺れる

「～～～～!!」

楓が声にならない悲鳴を上げ、さっきよりも強く手を握ってくる

「ひゃ?!」

不意打ちをもらった私の口から情けない声が出る

・・・・・・本当にさっきから、楓の方が心臓に悪い

「こ、怖かった～」
「そうだね、もう心臓がバクバクだよ」
楓のおかげで、という言葉は胸にしまい。話の続きに耳を傾ける
「でも久しぶりに来るとやっぱり楽しいね、遊園地」
「うん、私も」
「じゃあ次はどれに乗ろっか、できれば近くがいいよね」
そう言ってマップを広げる楓、横に広いから自然と端と端をお互いに持ち合う形になる
そのままお互いがマップを見ようとすれば必然的に
――――――――か、顔が近い。
こうなってしまう
咄嗟に体を引きそうになってしまうが、今離れれば嫌がったように見えてしまう
それは本意ではない、ということはつまり
「あっ、ここ。ここなんていいんじゃない？」
早急に行き先を決めるのが最善ということになる。私はよく見ずに適当な場所を指差す
「どこどこ？」
「ほ、ほらこの『廃病院からの脱出』って言う・・・・・・へ？」
「おー面白そう。なになに、『このアトラクションは脱出ゲームの要素を取り入れたホラーアドベンチャーです。途中の避難口からいつでもリタイアできますが、最後までクリアできれば豪華な景品が貰えるかも』。だって、楽しそう！　それじゃあ次の目的地はここにしよっか」
「う、うん。そうだね」
よく見ないで適当に指差したのは間違いだったかもしれない
い、いやでも。書いてあるほど怖くない可能性だって少なからずあるはず――――――――

「グエエエエエ！」
「キャー!!　無理無理怖い怖い！　かかかか楓、離れないでね!?」
――――――――なかった、わかってたけどやっぱり怖いものは怖い
「離れないでって、そんなにがっちり腕掴まれちゃ離れようがないよ・・・・・・」
「うう、そうかも知れないけど・・・・・・」
入った時から絶え間なく驚かしにかかってくるせいで、一時も気持ちが休まらない
私とは対照的に楓は先程からおばけ達が出てきてもあまり驚いていない
「・・・・・クルシイ・・・・・・イタイ・・・・・・タスケテクレェ」
「!!　か、楓～」
「もう、しょうがないなぁ」
情けなくしがみつく私を見かねた楓が反対の手を私の頭に乗せると
ゆっくりと動かし、落ち着いた口調で話しかけてくる
「大丈夫だって、きっともう少し進んだら非常口があるよ。だからもう少し頑張ろ、ね？」
楓はゆっくりと、諭すような口調で私に話しかけてくる。すると不思議と気持ちが落ち着いてきて、心なしか周りの景色も良く見えるようになってきた
「・・・・・うん、そうだよね。私、ガンバ」
「グオオオオオオオオオ!!」
「キャー!!　やっぱりムリー!!」
「うーん、これは先を急がないとダメみたいだね」
楓が困ったように笑いながら発した言葉は、私の耳に届くことはなかった

あの後最初の非常口までたどり着いた私たちは、そこから外に出て近くのベンチで休んでいた
「ゴメンね。楓は楽しめてたのに私のせいで」
「いいって、そんなに気にしないでも。珍しい美祐も観れたしね」
「うう、ホラーが苦手ってことは隠してたのに・・・・・」
そう、私はホラーと名のつくものは全てダメなのである
小さい頃に何かあったわけでもないのに、何故か恐怖心が付きまとってくる
そのせいで気になった作品のちょっとした演出がダメだったせいで見るのを諦めたり
先が気になっても明らかに怖い展開になってしまうと見れなくなってしまう
何度か克服しようと特訓もしたが効果はなく、泣く泣く受け入れて生きてきた
「でもあんなに怖がるぐらい苦手なら、どうしてあそこがいいなんて言ったの？」
「うっ。そ、それは・・・・・その・・・・・」
どうしよう、ほんとのことはもちろん言えないし。流石に適当なことで誤魔化せる雰囲気でもない、何かいい言い訳がなかっただろうか。何か、何か――――――――――
「――――――ほ、ほら！　昔楓がホラーが好きだって話ししてたでしょ？　それを思い出して」
「？　・・・・・・・あーっ！　確かに昔そんな話をしたことがあったね、結構前なのによく覚えてたねそんな話」
「たまたま覚えてただけだよ」
危なかった、とっさに記憶の底から掘り起こせたのは奇跡に近いだろう

「そっか、じゃあ美祐には悪いことしちゃったね」
「え、どうして？　むしろ迷惑かけたのは私の方で」
「いやまあ確かに中ではそうだったけど。私に気を使って我慢してくれたんでしょ？　」
「そ、そんなことないよ！　アレは私が悪いの、だから・・・・・」
　ああダメだ、こんなこと言ったって楓を困らせるだけ。でも素直に話すわけにも――――――――
「うーん、じゃあさっきのは〝おあいこ〟って事にしよっか」
　楓の言葉に思わず私は動揺してしまう
「え、でも」
「いいのいいの、そんなことより私お腹空いちゃった。お昼の場所は先に調べておいたんだ～、
　ちょっと早いけど混む前に中入っちゃおっか」
　楓はそれだけ言うと先に歩いて行ってしまう、私がどうすべきか決められずに座ったままでいると
　振り向いた楓が手を振って呼びかけてくる
「ほら早く～、あんまりゆっくりしてると置いてっちゃうよ～」
　楓はさっきまでの雰囲気が嘘のように、曇りのない綺麗な笑顔をしている
　その笑顔が私には眩しくて、眩しくて。――――――――――――――――――――眩しすぎた

「美味しかった～、やっぱり先に調べといてよかったね。こんな美味しいお店見逃しちゃうところだったよ」
「だね、私は特にカルボナーラが美味しかったかな」
「わかるわかる！　デザートのパフェもよかったし、また来たくなっちゃうよ」
「あ、あはは。そうだね、楓あのパフェ気に入ってたもんね」

あの後楓の調べてきたレストランで早めの昼食をとったのだが。
その際楓が頼んだパフェが
『わさび抹茶クリームと甘じょっぱい餡子たっぷりのミラクルパフェ』という、もはやツッコミどころしかない代物だったのだ。
本人曰く「すごく美味しい」らしい、でも私は怖くて食べていないなんでも『麻衣さん』という女性から勧められたらしいのだが・・・・・。これを食べようと思った彼女は果たして何者なんだろうか
私の疑問など知るよしもない彼女は楽しそうに次の行き先を聞いてくる
「それじゃあ次は何に乗ろっか」
「うーんそうだね、食べたばっかりだからゆっくりできる系のがいいかな」
「それじゃああれ乗ろうよ！」
そう言って楓が指差す先には、ゴンドラに乗って景色を楽しむタイプのアトラクションがある
確かにあれならゆっくりできるし、結構楽しめそう。それに世界観が私の好みのタイプだ
「そうだね、結構並んでるみたいだけどいいの？」
「大丈夫大丈夫。ほら早く行こ」
「わわ、押さなくてもいいって」
私は楓に背中を押されながらアトラクションへと向かった

「結構面白かったね」
「うん、そうだね。・・・・・ねえ楓、もう一回乗らない？」
「え？　別にいいけど」
「もう一回、もう一回だけ！」
「うーん、まぁいっか」

「後一回、それで満足するから！」
「・・・・・はあ、いいよ」

「ねえ、楓？」
「流石にもうダメだからね!?　ほら行くよ！」
「ああ～。そんな殺生な～」
〝まだ〟四週しかしてないのに・・・・・。もう少し乗りたかった
「・・・・なんだか今日だけで美祐の意外な一面をたくさん知れた気がするよ」
「そうかな？　確かにあんまりそういう話はしなかったかもね」
心なしか楓の表情が疲れ気味な気がするけどどうかしたのかな？
あんなに癒される空間にいたのに疲れるわけないと思うんだけどなぁ
「それじゃあ今度は私の乗りたいのに付き合ってもらうからね」
「それは全然構わないけど、何に乗りたいの？」
「それはもちろん――――――」
楓がニヤリと笑いながら目指す先にあったものは

「あわわわわ、かか、楓！　回しすぎだって！」
「まだまだ～！」
「あわっわわわわ、し、視界が縦に揺れてるから。揺れない方向に揺れてるから～」
そう、『コーヒーカップ』だった
別に苦手というわけではないのだが、流石にここまで高速回転され続けられたら話が変わってくる
というか本当にヤバい、そろそろ時間がくるはずなんだけど・・・・
『はーいお疲れ様でした～。カップがゆっくりと停止いたしますので、それまで立ち上がらずにお待ち下さ～い』

アナウンスの声とともにカップにブレーキがかかり、徐々にスピードが落ちていく
「や、やっと終わった～」
「あれ？　もう終わっちゃったのか。もっと回したかったのになぁ」
「勘弁して、もう世界が回って回ってしょうがないんだから」
そんなことを言っている間にカップは完全に停止し、係員さんが扉のロックを開けて回っている
私たちのカップも例に漏れず開けてもらうと、楓は先に降りて行ってしまう
「あ、待って楓！　本当に目が回ってまっすぐ歩けなイタッ！」
ふらふらとした足取りの私は近くのカップに激突してしまう
「うう、ちょと気持ち悪い」
おまけに常時視界がぐらついていたせいで吐き気がしてきた
「あらら、美祐大丈夫？」
「大丈夫も何も、こうなったのは楓のせいだよ」
いつの間にかすぐ近くまで来ていた楓に恨みがましい視線で抗議しておく
「あはは、つい力入っちゃって。ほら、手貸してあげるから外のベンチまで行こ？」
「うん、あー気持ち悪い～」
楓の手を借りて外に出て、少し離れたところにあったベンチに腰を下ろす
いつの間にか日は傾き始めていて、辺りは夕方の様相を呈している
夏も夕方になれば自然と気温が下がり、風が吹くと心地よい
「ふう、やっと一息つけるよ」
「コーヒーカップに乗る前にあんなにゆっくりしたのに？」
「それはそれ、これはこれだよ。私はもう少しここで休んでるから、何か乗って来てもいいよ」
「え、それは悪いよ」
「いいからいいから。ほら、メリーゴーランドなんて今空いてて次には乗れそうだよ？」

「うーん、じゃあお言葉に甘えようかな。ここで待っててね」
楓は立ち上がると小走りで待機の列へと向かって行った
手持ち無沙汰になった私は自然と楓の姿を目で追ってしまう
彼女が列に加わって少しすると、列がゆっくりと動き出す。徐々に楓の番が近づき、ちょうど彼女が入ったところで列が切られた、どうやら最後の一人で入れたらしい。相変わらず運がいい、だけど楓は少し進んだところで立ち止まると後ろを振り返って歩みを止める。
どうかしたのかな？　そう思い楓の視線を追えば、小さな女の子が目の前で切られたことでぐずっていた。
それを母親らしき人がなだめているが、どうやら御機嫌斜めになってしまったようだ
すると楓は係りの人に話しかけると、女の子の元に近づき目線を合わせるようにしゃがみこむ
少しすると女の子は楓に手を振りながら中へと走っていき、母親は頭を下げてから少女を追いかけて行った。どうやら順番を譲ってあげたらしい
楓には会った時から、子供には特に優しくする印象がある。単に子供が好きだからかもしれないけど、私にはもっと大きな理由がある気がしてならない。
それこそ楓の根源に近いレベルで、だ――――――

なんて思ってみるぐらい暇です。もう調子も良くなったし、楓のところにでも行こうかな
私はベンチから立ち上がり、ゆったりと歩みを進める
「・・・・・・楓、昔から子供に優しいよね」
「あれ、美祐。もう大丈夫なの？」
「うん、まあね。ところで何か理由でもあるの？　優しくする」
「それは、子供には優しくしてあげるのが普通・・・・・・っていうのもあるけど。一番は
誰かに優しくしてもらえることの大切さを、覚えておいて欲しいからかな」

「？　それってどういう――――――――」
だがその意味を聞こうとした私の声は、かき消されてしまった
『メリーゴーランド、まもなく入場開始ですのでお客様、準備をお願いします」
「ごめん、アナウンスで聞こえなかったや。もう一回言ってくれる？」
「・・・・・ううん、なんでもないや」
「そうなの？　じゃあちょっと乗ってくるね」
楓は私に軽く手を振ってから中に入り、手近な馬にまたがると私にもう一度手を振ってくる
私も返すように手を振り返すと、スタートのアナウンスが流れ。ゆっくりと回転し始める
メルヘンチックな曲が流れ、ゆったりとした回転に合わせて馬や馬車が上下している
淡いオレンジのライトに照らされながら回る様は、綺麗というよりもどこか幻想的だった

「楽しかった？」
「うーんそうだね、確かに楽しかったけど・・・・・」
私の質問に少し考える楓、何がダメだったのだろうか
「やっぱり一人じゃなくて、美祐と一緒に乗りたかったな」
恥ずかしそうに笑ってそう言う楓、私は一瞬どう返すべきか悩んでから。結局、無難な返しをしたのだった
「そっか、じゃあ次来た時には一緒に乗ろうね」
「うん！」

「わー！　やっぱり高いね～」
「そうだね、てっぺんからなら街並みも見えるらしいよ」
「本当？　楽しみだなぁ」
私たちは今、観覧車に二人で乗っている
あの後、最後に何に乗るかを聞いてみたら楓が「観覧車でしょ！」と言うので二人で並んで
閉園時間的にギリギリながらも乗ることができたのだ
もう太陽も沈み、空は黒々と染まり所々で星が煌めいているのが見える
「あっ、もうすぐ頂点みたいだよ」
楓の声につられて外を見てみれば、確かにもうすぐ頂点に着きそうだ
お互いが外の景色に意識を向け、自然と口数が少なくなっていく

「「・・・・・・綺麗」」
前から同じ言葉が聞こえてきたことに驚いて、そちらをみると
楓は外の景色に目を奪われていてこちらには気付いてはいなかった
「・・・・・綺麗、だね」
私は夜景とガラスに映った楓の両方を視界に入れて、そう呟く
でもそれがどちらに向けて放った言葉だったのか、それとも両方に向けたものだったのかは、
私にもよくわからなかった。
でも柄にもなく、こんな時間が一生続けばいいのに。そう思ってしまった

でもやっぱり、現実はそう優しくはなかった

「次は、雅紀と一緒に来たいな・・・・・」

彼女の口から零れ落ちたその一言で、私の意識は急速に引き戻されていく
そして理解したくなかった、私には残酷すぎる現実を目の前に突き出してくる
『私が、二人の間に入り込む隙間なんて。少しだって無い』
――――――――大丈夫、分かってたことだもの。私が入り込む隙間なんて二人の間には無い
そんなこと初めから分かっていたこと、だから、今はまだ、我慢しなくちゃ
「あ～見えなくなっちゃった。でも綺麗だったよね！」
楓は少し興奮気味な顔でこちらを見ている
私も合わせなきゃ、今違和感に気づかれて心配されてしまったら、きっと我慢できなくなってしまうから
「うん！　すごく綺麗だったよね」
私の精一杯の笑顔に、楓は気づかずにいつものように笑い返してくれるのだった
「それじゃあ私こっちだから、また明日ね」
「うん、またね」
楓が乗り換えの改札を抜けて、その姿が見えなくなるまで見送る

そしてその姿が人混みで見えなくなったその瞬間、私の心の扉をドン！　っと叩く音がして
我慢していたものが溢れ出しそうになる
――――――――――――――――――――頑張れ私、家に着くまで、もう少しだから
私は踵を返し、駅のホームへと早足で向かっていった

最寄駅の改札を早足で通り抜け、そのまま家に向かって全力で駆け出す
徒歩１０分ほどの距離しかないのに、家に着く頃には息が上がって苦しかった
私は少し震える手で玄関の鍵を開けて中に入り、後ろ手で鍵を閉めると。そのままズルズルと
扉に寄りかかる形で座り込んでしまう
――――――――――――――――――――もう家だもんね、我慢しなくたって、大丈夫だよね
そう思った途端、心の鍵が壊れる音がして中にしまい込んでいた感情が一気に溢れ出していく
「うっ・・・・・・ううっ・・・・・・っっう」
――――――――――――――――――――いい大人なのに、泣くなんて恥ずかしいなぁ。
・・・・・でも、今だけは泣かせてほしい。だってそうすれば、明日からいつもの私に戻れるから。　だから今は・・・・今だけは・・・・・
私は声が掠れるほどの大きな声で泣いた、今まで我慢して溜め込んだものを吐き出すように
そして、明日からいつもの私に戻れるように

「あ、あああ、ああああぁぁぁぁぁ――――――‼」

雨のち雲り。翌快晴

いつもより、早く起きて。じっくりと髪のお手入れをする
学校に行くときみたいに下しただけじゃなくて。サイドに編み込みも入れていく
普段はあんまりしっかりとしないお化粧も、つい力がはいる
でも先輩は化粧の濃い子は好きじゃない感じだから、できるだけ薄く。でもしっかりと
綺麗になるための努力を最大限して。服も何日も考えた末の一着に袖を通す
玄関の姿鏡でもう一度全身をチェックする
化粧、オッケー。前髪、オッケー。編み込み、オッケー。服の組み合わせ、オッケー。靴も…大丈夫
全部完璧、どこから見てもかわいい女の子だ。大丈夫、これなら先輩だって、きっと可愛いって…言ってくれるかなぁ？
先輩、そういうのは照れて言ってくれない気がする。でもまあ、そう思ってくれれば十分か
「…よしっ！」
私は勢いよく玄関を開け外に駆け出す
今日は大事な、先輩との遊園地デート。今日こそは絶対に、先輩に意識してもらうんだから!!

……せっかくの遊園地デート。だったのに
「あー、なんだ。その。天気ってのはどうしようもないからな。だから、その」

「……」
なのに、なのに、なんでこんな時ばっかり
「雨が降るんですかー!!!」
「うおっ、急にでかい声出すなよ」
横にいた先輩が突然大声を出した私に驚いて抗議してくる
確かに横にいる人が急に叫んだらビックリするけど、そんなに言わなくても
ってそんなことじゃなくて、今文句を言うべきはこの天気に対してだ
確かに家を出るとき空を見て『あ、これ危ないな』って思いましたけど
天気予報見て『あ、これダメなヤツかもしれないな』って思ったけど
でも、だからって、今日に限ってそんなのって、あんまりじゃないですか
驚く先輩を横目につらつらと心の中で文句を言う
あんまり心の中で溜めすぎてしまったせいか、つい口から思っていたことが漏れてしまう
「…あーあ。なんで今日に限ってこんな土砂降りになっちゃうんですかね」
「さてな。俺に聞かれても天気のことはわからん」
「いや、そんなリアルな事情は聞いてないですから…」
無駄に律儀な返答をしてくる先輩に軽く突っ込みを入れておく
あーあ。せっかくのオシャレもこの雨じゃあ台無しになっちゃうなぁ
髪だって濡れたら緩んじゃうかもしれないし…
っていうか先輩。私の格好見ても『おう』としか言わなかったし
なんですかおうって、おうはないでしょおうは
どんだけ褒めるの苦手なんですか奥手なんてもんじゃないでしょ
それは
せっかくのオシャレがつぶされた怒りを褒めてくれなかった近場

の先輩に向ける
理不尽だろうか。否、これは褒めなかった先輩が悪い。よって私は悪くない
そんなことを考えて気を紛らわそうとしても、やっぱり残念だったものは残念なわけで
今日、先輩の前では一番可愛い私でいたかったのに。そんなことすらも許してくれないらしい
「あーあ。ほんと、ままならないものですね」
「……」
私の困ったような笑いを見て先輩は少し困惑したような顔をする
正直、そりゃそうですよねと思った。男の人からしたら女の子のこんな気苦労なんて別世界のことだし。何よりも先輩は私のこの気持ちにすら気づいていないわけで…
そんな先輩が私が今どんなこと考えてるかなんてわかるわけが―

「……別に、遊園地に行かなくたって遊べる場所なんてたくさんあるだろ」
「…え？」
「だから。この雨じゃ遊園地は無理だけど、ここなら雨に濡れずに遊べる場所ぐらい腐るほどあるだろってことだよ」
突然何を言い出したのかと思ったら。どうやら私が遊園地に行けなかったことが悲しいんだと勘違いしているらしい
なんというか、先輩らしい。あまりにも先輩らしすぎて思わず笑ってしまいそうになる
いけないいけない。ここで笑っては先輩に悪い、先輩は私を気遣ってくれたんだ
ここはできるだけ平静を装って…
「……っふ、くっ、ふふふ」
「…おい、なんで笑うんだ」
「いえ、別に、っふふ、何でもないですよ？」
「嘘つけめっちゃ笑いこらえてるじゃねえか！」

堪えきれずに笑ってしまった私を見て
人がせっかくフォローしてやったのに、とかなんとかぶつぶつ言ってる先輩はきっと私が何に悲しんでたかなんて、一生分からないんだろうなあ
でもまあ、フォローを入れようという優しさは評価できますね
「コホン。すみません、笑いすぎましたね。それじゃあ先輩は遊園地に行かない代わりに、私のお買い物や遊びに付き合ってくれるってことでいいんですよね？」
「…そうだが、あまり派手に買い物をするなよ？　あくまで俺が持てる範囲で、だからな」
心配そうな顔でそう忠告してくる先輩は最初から買った荷物を持ってくれるつもりらしい
そういうところは気が回るのになぁ。なんでもっと気づくべきところに気づかないのかなぁ。
まあ、あんまり聡くても困るんですけど
「はいはいわかってますよ～」
考えていることがばれないようにそんなお気楽な返事を返し。私は近くのお店に向かって歩き出す
後ろで　ホントにわかってるのか…？　って小さく聞こえたから
わかってますよーって返したらため息をつかれてしまった。心外だ、先輩が持てるギリギリはちゃんと把握してますよーだ
さて、楽しい楽しいお買い物タイムです！

「――――――ざっとこんなもんですかね」
買い物がスタートしてから約二時間半。先輩の手には大量の紙袋が握られていた
結構じっくりといろんなお店を見て回ったから、欲しかったものは

大体買えた気がする
　それにしても結構派手に散財しちゃったから、これからはちょっと節約しないとだめかなぁ
「おまっ、ほんとに俺が持てるギリギリまで買いやがったな…!?」
「持てる範囲でって言ったのは先輩ですよ～」
　重いなら重いって言えば少しぐらい持つのに。変に意地っ張りなんですよね、先輩
　現に私がちょっと意地の悪いことを言うと、先輩は苦虫を噛み潰したような表情をするが、決して重いとは言わずに頑張って持ち続けている
　少しぐらい頼ってくれてもいいんだけどなぁ…
　まあ頑張ってる先輩も見てて楽しいので、別にいいといえばいいんですけど
　とはいってもさすがにこのままでは少し可哀想なので、私から救いの手を差し伸べてあげましょうか
「それじゃあ先輩、こっち付いて来てくださいねー」
「もう何も持てないからな」
「いやいや。私そんな鬼畜じゃないですから」
　どんだけ私のこと鬼畜だと思ってるんですか先輩…
　確かに先輩をからかうのは好きですし、今みたいにちょっと無理してるとこ見るのは好きですけど
　別に私は先輩のこといじめたいわけじゃないですからね??
　そんな怪しむ先輩を連れてきた先は新しいお店。ではなく――――
「…なんだ？　ここ」
　首をかしげる先輩に私は少し大げさな身振り手振りを付けて説明をする
「ふっふーん。なんとここでは買った商品を家に送ってもらえるんですよ！」
「ふーん。便利なもんだな」
　あれ、意外と反応が薄かった。もっとのってくれてもいいと思うん

だけどな
まあいいか。私は先輩の持っている荷物を軽く奪うような形で代わりに持つ
うわ…結構、っていうかかなり重い。我慢しないで言ってくれればよかったのに
「まあそういうわけで。先輩の荷物持ちはここまでです」
「ん、そうなのか？　でもこんなの使ったら送料とか掛かって余計高くなるんじゃ」
「この場所で買ったものなら送料無料なんですよ。だから大丈夫です」
っていうか腕がきついから早く預けてしまいたい
…これは少し先輩にやさしくしてあげたほうがいいかな
そんなことを考えつつ。先輩を連れて中に入って受付のお姉さんに商品を預ける
送り先の住所を記入して、レシートでここの商品だと示して許可をもらえば手続きは終わりだ
そのまま外に出て大きく一度伸びをする。少ししか持っていなかったのにちょっとだけ腕が痛い
伸びをしたついでに腕時計を確認する
時刻は十二時過ぎ。お昼にはちょうどいい時間だ
私は先輩にお昼の提案を持ちかける
「先輩お腹すいてませんか？　もうお昼時ですけど」
「ん？　もうそんな時間か。確かに少し腹は減ってるな」
「そうですよね。それじゃあどこかでお昼にしましょうか、先輩はどこがいいですか？」
「そうだな…簡単に食べれるものがいいんじゃないか？」
「簡単なものですか…」
私がマップと周りの景色を交互に見ながらお店を探していると。先輩が小さくふっ、っと笑う
何かおかしかったかな？　そう思って辺りを見回しても特に何かあるわけでもない

一瞬自分の格好のことを笑われたのかと思ったけど、先輩はそういう時は笑わずに素直に指摘してくるはずだと思いなおす
でもじゃあなんで先輩は笑ったんだろうか……あっ
「確かに、この状況はデジャブを感じますね」
確か楓ちゃんの服を買いに来た時もここで同じような会話をした記憶がある
その時も私が何が食べたいか聞いたら、簡単に食べれるものがいいと先輩が答えたのだ
今回は楓ちゃんがいないけど。先輩もきっとそのことを思い出してあんな風に笑ったんだろうな
そう思って言ったら
「……」
なんでか先輩から渋い顔をされてしまった
もしかして間違ってたのかな？　私が不思議そうに首をかしげると先輩は
「いや、前から聞きたかったんだが…お前、ひょっとして俺の考えてることがわかるのか？」
「……は？」
あまりに突拍子のないことを言うもんだから思わず怒っているみたいな言い方になってしまった
もしかして本気で聞いているのだろうかこの人は
いやでも心が読めるのかって…
「先輩。漫画の読みすぎじゃないですか？」
「なっ！　そんなに漫画は読んでねえよ。お前らがあんまりにも俺の思考を読むからつい」
「あぁ…。そういう」
『お前ら』ってことは。多分楓ちゃんにも何回か考えてることがバレたらしい
楓ちゃんに考えてることがばれて必死に焦ってるのを隠している先輩の姿が容易に想像できた
まあでも先輩は考えてること結構顔に出ますし、ちゃんと見てれば

誰でもわかっちゃう気もしますけどね
「…そうですねぇ。もしかしたら、そうかもしれませんね」
私がいたずらっぽく笑ってそういえば、先輩は困ったように頭を掻いてため息をつく
こういういつもの。私が素の自分を見せる前からのやり取り
そんないつものやり取りが、私はたまらなく好きで。だからいつも先輩をこうやってからかって
でもまあ、あんまりからかいすぎるとたまに手痛いしっぺ返しが来るから適度にやるのが一番――――――
「ま、お前にだったら心読まれたって別にいいけどな」
「……へ？」
予想外の言葉に思わず変な声を出して固まってしまう。いま、なんて？
「いや、お前だったら心読まれても特に問題ないなって」
「え、えっと。その、それはどういう…？」
え、もしかして。先輩、私に対して特別な信頼を……!?
いやいや、先輩に限ってまさかそんな、いや、でも、もしかしたら、もしかするんじゃ…!!??
「？　そりゃ、お前は別に〝友人〟の汚点を暴露して回るような奴じゃないと思ってるからだが？」
……ハアアアアアアアア
心の中で大きな、大きなため息をつく。そのまま腕を振りかぶり
「うおっ!?　なんだ急に、ちょ、痛い痛い！　なんで殴るんだ!?」
「うるさいです！　ホント、ホントそういうとこですよ！　そういう!!」
「意味わからん理由で殴るのはやめろ！」
「先輩にわからなくても私には大いにわかるんですよ！」
なんですか！　なんなんですかホントに!!
まったくもう。この人はどこまで鈍感なんですかね!!!

「ん～。結構ここのランチ美味しかったですね」
「ああそうだな。俺の財布の中身がまあまあ軽くなるぐらいの値段はしたけどな」
レストランから出て財布の中身を見て先輩は一瞬眉間に皺が寄る。まあ確かに、私も奢りじゃなかったら食べないかなってぐらいにはいいお値段だった
まあ私をなだめるために『昼飯奢るから』なんて安直な手を使った自分を責めるんですね
そんなこと言わずに、普通にデザート奢るとかにしておけばカフェで少し財布を痛める程度で済みましたよ
「そんなことよりも先輩。次はどうしますか？」
「そんなことって…。まあ、飯食ったばかりなんだから映画とかでいいんじゃないか」
「映画ですか。先輩にしてはいいチョイスですね」
「一言余計だ」
軽く小突かれてしまった。頭をさすりながらスマホで上映時間を調べる
えーっとお昼過ぎのこの時間にやってるのは…マジですか
「…えーっと先輩？　この二つみたいですけど。どっち見ます…？」
「……いや、この二つってなったら実質一択な気がするんだが」
「ですよねぇ…」
今から見れる映画は某国民的児童向けアニメか、最近話題の恋愛映画しかなかった
腐っても休日のお昼だというのにこの上映数で果たして映画館はやっていけるのだろうか
それともこれ以外の映画が軒並み不人気だったのか
しかしなんというか、恋愛映画を二人っきりっで見るという行為そ

のものは個人的にはとてもデートっぽくていいのだけれど
先輩はこういうの嫌だったりするのかな…？
「あのー…」
「ん、どうかしたか」
「いえ、先輩はこの映画でもいいのかなーって。私は全然かまわないんですけど、ほら男の人ってこういうの見てても退屈だったりするんじゃないかなーって」
「いや、別に構わないが？」
即答である
あっ、これは何も気づいてないですね
折角私がそれとなくフォローしてあげたのに全てを踏みにじる一手を投げてきましたね
男女が二人で出掛けて、そして映画館で二人で恋愛ものを見る。その事の重みをまったく分かってない顔してますね！
そうでしたね。先輩はそんなこと気にする人じゃなかったですね。私ばっかり気にしてなんだかバカみたいです
「あっはい。それじゃあ行きましょうか。席なくなっても困りますしね」
「？　お、おう」
なんだろう。相手がまったく気にしてないってわかるとすごく落ち着いていられるけど
なんていうか、すごい、悲しくなってくる…
「……？」
やめてください先輩。不思議そうな顔されるとこっちもきついですから…

やってる本数が少ないからてっきり席は埋まってて、端のほうとかになるのかと思っていたがそんなことはなく。ど真ん中の席を二つ並んでとることができた

本当にこの映画館はやっていけるのだろうか、不安になるくらいあっさりと取れてしまった
「よかったな、真ん中の席取れて」
「そうですね。てっきり端っこになると思ってたんですけど」
そんな話をしながら二人でエスカレーターに乗って二階三階と階を上がり
上映される劇場のあるフロアでポップコーンとジュースを買う
ちなみに私はストロベリーポップコーンとカルピス
先輩はキャラメルポップコーンとウーロン茶だった
そのまま劇場の自分たちの席に向かう
中はそろそろ始まる時間だというのに空席が目立つ印象だ
やっぱりここの映画館、人気ないのかな？
「先輩、ポップコーン分け合いっこしましょうよ。私のもあげますから」
「いいぞ。ほら…って、お前取りすぎだろ」
「気のせいですよー。はい先輩もどうぞ」
結構大人げなく取った私を先輩はジトッっとした目で見ていたけど
結局二つほど指でつかんで口に入れていた。なんだかんだ私の分はあまり取らないあたり優しいというかなんというか
そんなことをしていたら気づけば劇場の明かりは落ち、視聴の際の注意説明の映像が流れ始める
この頭部が一世代前の録画機器の男性キャラも、随分と有名になったものですね
ある意味、映画館というとこの人みたいなとこありますよ
それと同じぐらい頭部が赤色灯の人も有名ですけど
そんな彼らのお決まりの流れを眺めていると、やがて劇場の明かりがすべて消えて真っ暗になる
本編が始まる合図。それに合わせて私は今一度自分の椅子に座りなおした

映画が始まって…大体一時間ぐらいが経っただろうか
私はすでにこの映画に飽き始めていた
お話自体は…まあ、悪くないと思う。役者の人も…まあそこまで非難する点はないと思う
でもやっぱり、そんなそこそこの映画は飽きてしまうわけで
これ、先輩相当つまんないんじゃないですか…？
そう思ってこっそり横を見てみると
「……」
思いのほかきちんと見ている。というか普通に見入っている
先輩は左肘を組んだ足の上に置いて前のめりになりつつ、頬杖をしながらじっとスクリーンを見ていた
あまり手が動いていないのかポップコーンが大して減っていない印象だ
先輩がこの手の、まあ言ってしまえばB級映画レベルのが好きだったのは少し意外だった
それとも恋愛映画をあまり見たことがないから、これがどの程度のものなのか分かってないとかかな？　…絶対分かってないだけな気がする
映画に飽きていた私はバレないようにこっそりと先輩の横顔を観察し始める
…うーん、やっぱり顔はまあまあイケメンですよね。もちろん先輩よりもカッコイイ男子はいっぱいいますけど
性格は鈍感過ぎるところさえなければ気配りもまあまあできるし、ちゃんと男子らしく荷物持ったりとかできるし
いやほんと、鈍感なところさえなければ。あと謎に褒めたがらないところさえ直してくれれば完璧なんですけどね…
というか、なんであんなに気づかないんでしょうか
正直結構自分でもバレても仕方ないなって思うこと何個かあったんですけど

ホントに全く。この人はどこまで、私をやきもきさせるつもりなんですかね
呆れ半分愛おしさ半部の笑みがこぼれる。その瞬間
先輩は突然姿勢を変え、一瞬こっちに顔が向く
突然のことに驚いて私は固まって動けず、そのまま先輩と目が合って――――――
そのまま先輩は映画のほうに視線を戻してしまう
えぇ…そこ何も言わないんですか？　ちょっとくらい何かあってもいいんじゃないですか？
そう思ったけど相手はあの先輩だということを思い出して小さく息を吐き、そのまま椅子に深く腰掛ける
つまらないけどあと一時間ぐらいで終わるだろうし、黙って見てましょうか

そう思って五分で眠くなってきた
やばいです…ただでさえ映画館って真っ暗なのに、それに加えて丁度映画もシックな曲が合うシーンに差し掛かってしまった
こんなのもはやただの睡眠用ＢＧＭですよ
私は眠い目をこすろうと右手を肘掛けから上げようとして…あれ？
なんだか程よく重いものが私の手にのっている感じがする
今の今まで眠気と格闘していたせいで全く気付かなかった。いったい何が――――――
「――――――ッ!!??」
声を出さなかった自分のことを褒めてあげたい
なにせ私の右手の上にのっていたのは他の何物でもない、先輩の手だったのだから
驚きのあまり視線は右手にくぎ付けになり、先ほどまで回っていなかった頭は急速に活動を再開する。しかしどれだけ頭が回るようになってもこの状況をどうにかする手段を思いつけず
…いや、これはこれでありなのでは？

先輩と、ちょっと変だけど手を繋いでいるとも言えなくないこの状況。そんな激レアな瞬間を
自ら変える必要なんてこれっぽっちもないんじゃ…
そこまで思考が迷走しかけたところで先輩がこちらを向く
今度はすぐにスクリーンに視線を戻すことなく、私の所で一度止まる
じっと下を見ている私を不審に思ったのかつられるように視線はそのまま下がり、私たちの手の所で一瞬止まって
「っ!? すまん、映画に意識が向き過ぎてた」
シュバッって音がしそうなほどの速さで重なっていた手をどける
そのまま頬杖をつこう、として慌てて逆の手に変える
その顔は少し赤くて。さっきよりも映画に集中できていないのがわかる
照れてくれた。そのことがなんだか私は嬉しくてつい右手をさする
だって先輩、全然そういうの反応してくれないし。私のこと、女子として全く意識してないんじゃないかって。そう思ってたけど
…なんだ、先輩ちゃんと私のこと女の子って意識してくれるんだ
つい頬が緩んでしまう。危ない危ない、こんなところ先輩に見られたら大変だ
ほっぺをムニムニと揉んで緩んでいた表情を正す
…よし、これでたぶん大丈夫
さて、映画が終わったら早速先輩をからかってあげないとですね
そこからの映画は、ちょっとだけ面白くなった気がした

「そうですね～。一番びっくりしたのはやっぱり先輩の大胆な行動、ですかね？」

「……」
なんだかんだ最後は意外と面白くなった映画の感想を言い合いながら外に出た私達
先輩はやっぱりそれなりに最初のほうから真面目に見ていたらしく、私が曖昧にしか覚えていないところなんかもしっかり覚えていた。先輩はやれあそこが良かったとかあのシーンは驚いただとか楽しそうに話してて、私的には楽しそうな先輩を見て満足してたんだけど。流れで私に、お前はどのシーンがよかったとかあるか？　って聞いてきたから少し意地悪に返してあげた
まあ、案の定黙っちゃいましたけどね。でもあの顔はホントに嫌がってる顔じゃなくて少し呆れが混じった表情。本気で嫌がるなら謝って話を変えますけど、このぐらいなら怒りもしないと思う
「…悪かったよ、あんまりその件を掘り返すな」
「え、いや、私もそんな嫌ってわけじゃなかったですけど…」
そういう先輩の顔は少し落ち込んだような表情で
あれ？　実は先輩結構気にしてました??　これは少し申し訳ないことをしてしまったかも
謝ったら許してくれ…るよね？　そこまで怒ってるって感じはしなかったし…
恐る恐る先輩の顔をのぞき込むと
「……」
なぜだか必死に笑いをこらえるような顔で私のことを見ていた
訳が分からず首をかしげると、先輩はもうダメだと言わんばかりにふきだす
「つく、アッハハハハハハハハ！　そんな顔すんなって、演技だよ、演技」
「…演、技？」
「そ、演技」
「……まさか!?!?」
やられた。まさか今まで先輩をからかっていた私が、あろうことか先輩に一杯食わされるなんて！

屈辱です。何よりも先輩に騙されたのが屈辱です
「ま、お前普段いいように俺のことからかってくれるからな。その仕返しだよ」
「くうぅぅぅ、まさか先輩に仕返しされるなんて。悔しいです！」
「ハハハ。これに懲りたら、もう下手にからかおうとするのはやめることだな。あれ、結構恥ずかしかったんだぞ？」
「あれって、あの手が――――――」
言い切る前に先輩の手刀がトスッと頭に落ちる
まったくと言っていいほど痛くなかったけど、これは本気であまり言ってほしくないんだろうなって思った
「おっと。それ以上は言うなよ、恥かしかったのは本当だしな」
「…わかりましたよ。その代わりゲーセン行きましょ！　ゲーセン！」
「ハイハイ。お前の好きなところで構わないさ」
「そこで先輩のことボッコボコにしてあげますよ！」
「お前それ絶対さっきの憂さ晴らしだろ」
「そんなわけないじゃないですか。とりあえずチュウニズム辺りでいいですよね？」
「おまっ、俺が音感無いの知っててあえて選びやがったな…」
「ちなみに私は結構やりこんでます」
「確信犯かよ」
そんな益体もない話をしながら二人でゲーセンに向かう
夏も終わりが近づくこの季節だけど、まだ日が昇っている時間は長い。もう少し遊んでいってもいいだろう
先輩と肩を並べて、こんな風に話している時間は私にとっては何よりも価値があるものだ
だからこそこの時間が少しでも長く続けばいいのにって、そう思って少しでも先輩といられるように無意識に動いてしまう
時間が止まってしまったらこの先の楽しみも無くなってしまうから困るけど
今だけ。今だけ時間がゆっくり流れてくれればいいのに。そう思

う
「しょうがないですね～。じゃあちょっと手加減してあげますから」
「いや手加減とかじゃなくてもっとフェアなゲームでだな…」
「それじゃ私が先輩を圧倒してどや顔が出来なくなるじゃないですか」
「言いやがったなお前。せっかく人が避けてやったのにそこを言いやがったな。なら俺だって考えがあるぞ」
「へ～？　まあ先輩が私に勝てるわけないんですけどね～」
「言ってろ。もう一回一泡吹かせてやっからな」
…ま、今はそんなこと考えてないで。この時間を楽しみましょうか
今は今しかないのだから。って誰かが言ってた気がしますしね

ちなみに先輩の提案したルールにより
・私は毎回曲を変えること。難易度は常にＭＡＳＴＥＲ縛り
・先輩は最初の一曲のみ。難易度はＭＡＳＴＥＲとすること
・十五本勝負。先に八勝したほうが勝ち

序盤こそ先輩は初見の難易度ＭＡＳＴＥＲに苦しみろくにスコアを伸ばせず。逆に私は慣れた曲で順調に勝利していった
しかし中盤からは私の苦手な曲や初見曲もやらなければいけなくなり思うようにスコアが伸びず、逆に驚異的な暗記力で譜面を覚えた先輩が追い上げてくる構図になる
終盤は暗記した先輩に私がセンスだけで曲をクリアし喰らいつく形になり、最終的な戦績は……

先輩・七勝八敗。私・八勝七敗

辛くも勝利をつかんだ私は柄にもなく拳を天に掲げ。先輩は膝を地につけていた

激戦を制した私は後日食堂のデザートをひとつ奢ってもらえることになった。やったね

「いやー。今日は思いっきり遊んだって感じしましたね！」
「そうだな。俺も久しぶりにこんなに遊んだ気がするよ」
「ふふん。これも私が誘ったおかげですね」
「ハイハイ。ありがとな」
結局一日中遊びまわった私たちは今、帰りの電車に揺られている
電車は帰宅ラッシュの時間帯からは少しずれているおかげか、座れない事はないぐらいの混み具合だった。うまく隣同士の席を確保した私達。ちなみに帰りは路線が違うはずの先輩がどうしてここにいるかというと
今朝から降り続いていたていた雨は結局最後まで止まず。むしろ雨脚は強くなっていたのだが
変に気合を入れ、雨は降らないとおかしな意地を張って傘を持ってこなかった私は当然この雨に対処できず
逆に天気予報をきちんと見て折り畳み傘を持ってきた先輩は、天気予報を見ておきながら傘を持ってこなかった私のことを意味が分からんと言わんばかりの顔で見ていて
『…お前、朝の天気予報見てきたんだよな？』
『いえ、見たんですけど…降らないって変に過信しちゃって…』
『なんだそれ……ハァ、しょうがないから家まで送ってやるよ』
『うう、わかってますよ。私は一人悲しく雨に濡れながら家に…え？』
『ここで濡れて帰らして、明日お前が風邪ひいたとかだったら目覚めが悪いしな』
こんな会話の末。私は先輩に家まで送ってもらえることになった

のでした
　これが怪我の功名ってやつかな？　…ちょっと違うか
「で、お前の家ってどこら辺にあるんだ？」
「あ、えっと××駅で乗り換えて△△駅で降りて。それでちょっと歩いたらすぐの所です」
「まあまあ遠いんだな」
「ええ、まあまあ」
「……」
「……」
　それっきり会話が途切れてしまう
　周りには他のお客さんもいるからあんまり騒ぐのもよくないと思うけど
　こんな風に沈黙なままというのも非常に気まずい
「…あーっ！　先輩、そういえば今日の私のこのオシャレに一度も触れてくれませんでしたね⁉」
　私は少し大げさにそう話を振る。もちろん声は少し抑えめにしてある
　私の言葉に先輩は　せっかく触れずに過ごせそうだったのに…、みたいな顔している
　いや、女子の服装ぐらい褒めましょうよ…
「…お前だって知ってるだろ。俺はそういう誉め言葉が苦手なんだよ」
「そりゃ楓ちゃんの時もあんなだったんだから当然知ってますけど。そんなんじゃ他の女の子にモテませんよ～？」
　からかうつもりで言っておきながら、先輩がほかの女の子といる光景を想像して胸にちくっとした痛みが走る
　馬鹿か私は。自分の言葉で自分を傷つけるなんて。いっぱい遊んで疲れてるからかな？　マイナスな考えが頭をよぎる
　そのことを悟られないように私はすぐに笑みを浮かべる
　でもそんな私の一瞬の出来事に先輩は気づかず、めんどくさそうに頭をバリバリと掻くと

「あいにく、女子からモテたいだなんて思ってねえよ。なにかと面倒事のが多そうだしな」
「…ふーん、そうなんですか。――――――じゃあ、私と今日出かけたのも、後で面倒なこと言われたくなかったからですか？」
「…ん？」
あれ、私今何言った…？
先輩の訝しむような顔を見て自分の失言に気づく
いやいやホントに何言ってんの私!? これじゃあ只のめんどくさい女じゃん！ な、何か言ってごまかさないと…！
自分でも何を言ってるのかわからないような発言に慌てて言葉を繋ごうとする
「あ、あのっ――――――」
「お前、なんか勘違いしてないか？」
「――――――え？」
先輩の言葉に思わず気の抜けた声が出てしまう
「俺は別に、お前が断ったら面倒なことをしそうだから了承したわけじゃないぞ？」
え？ …でもさっき、面倒が、多そうだからって。だから、私からのお誘いだって、きっと妥協で了承して…
「俺はお前とだったら遊びに行っても楽しめると思ったから誘いを受けたのであって。別に断ったらめんどくさそうだったからなんて理由じゃないぞ？ っていうかお前そんなこと思ってたのか？ それはそれで心外なんだが」
……あ、そっか。先輩は、鈍感で、でも変なところで気が回って、よくめんどくさがって、雑な対応をしたりもするけど
この人は、いつだって私のことを、邪険に扱ったりはしなかった。いつも、なんだかんだ付き合ってくれて。一緒にお話してくれて。今日だって、来てくれて
それは、決して面倒事を嫌ったからじゃなくて。私に付き合ってやってもいいって、一緒に出かけてもいいって。そう思えたからで
そこまで気づいてから自分がどうしようもなく嫌な女に見えてし

まって
先輩はこんなに純粋に私のことを見てくれたのに、それに比べて私は。そう思うと自然と泣きそうになってしまって
「っ、そう、ですよね。先輩、優しい、ですもんね。すごいなぁ、尊敬、しちゃいますよ」
「…まて、お前今ひょっとして」
「泣いてなんかないですよ!!!」
焦って大きな声が出てしまい電車中の視線が私に集まる
先輩も驚いて固まってるし、たぶん私の目尻は赤くなってて、瞳もうるんでて
私は先輩に泣いてるってバレたことや、電車の人にも見られた羞恥心から顔から火が出そうになって、それで
「…うっ…ひっぐ…うぅ…」
「おおちょ、おま!? こんなとこでっ、あーほらとりあえず降りるぞ！すいません！ 降りまーす！」
「うぅぅぅ……」
電車が運よく駅に着いてくれてよかった。このまま乗ってたらどうなっていたか
先輩に手を引かれながら電車を降りて、近くのベンチに座る
座っても手を離さないでいてくれるのは、私が手を強く握っているからだろうか
それとも、これも先輩の優しさだったりするんだろうか。どっちでも、今の私にはありがたいことなんだけど

先輩は何も言わない。何も言わずにただ私の手を握りながら横に座ってじっとしている
ふふ、きっと先輩のことだから。泣いてる女の子に何て声かけていいかわかんなくて、ただじっとしてるしかないんだろうなぁ
そういうところも素敵なところだと思うけど、慰められるようにもならないとダメですよ?
そんなこと考えられるくらいには私も落ち着いてきたみたいだっ

た
ごしごしと目元をこすって、もう濡れてないのを確認する
「…先輩。その…ありがとうございました。それから、急に泣き出したりしてすみません」
「まったくだ。…だがまあ、落ち着いたみたいで何よりだよ」
そう言って先輩は繋いでいた手を離そうとする
あっ… そう口から情けない声が漏れ、先輩の手を離すまいとつい力が入ってしまう
しまった。そう思ったけど、握られた手を先輩は少し驚いた様子で見て、でも何も言わずにそっと握り返してくれた
繋いだ手からじんわりと温かさが広がっていく
それはまるで先輩の心の温度がそのまま伝わってきてるみたいで
私の心にもそれは広がって、すごく安心して穏やかな気持ちになる
「…先輩。怒ったりしないんですね」
「怒るようなことじゃないだろ。お前が泣くぐらいのことを、俺も言っちまったみたいだしな」
「ちっ、違います！ 別にあれは先輩のせいじゃなくて、その、あれは…」
とっさに否定したが、まさか自己嫌悪で泣いていましたなんて言えるわけもなく
どう答えたものかわからず言葉に詰まってしまった私を見て先輩は
「別に無理して言わなくったていい。誰だって予想外のことで泣きたくなる時だってあるし、それを上手く説明出来ないことだってあるだろ」
そう言って優しい笑みを浮かべる
あまり見ることはない、先輩の相手を思いやるときの笑顔
そんな笑顔を見せられて私は。ずるい。そう心の中で呟く
先輩が優しすぎるから。先輩がもっと私を突き放したり、叱ったりしてくれれば
これはダメだって、ちゃんと言ってくれれば。そんな何でも許して

くれなかったら
そうしてくれれば、私ももっと線引きができたのに。なのに先輩はどこまでも優しくて
だから私も、つい、もう一歩って、そう思っちゃって。だから
悪いのは、先輩なんですよ
「……雅紀」
「!? 急にどうし――――――」
先輩の唇に自分の唇を重ねる
大人がするようなキスじゃなくて、ただお互いの唇どうしを重ねるだけの子供っぽいキス
でも私にはそれだけでも心臓が破裂してしまいそうなほど恥かしくて
丁度到着した電車の車窓から零れる光が私たちの横顔を照らしていく
一瞬だったけど、無限のように感じられた時間のあと。私はゆっくりと顔を離す
「……好き。雅紀のことが、好き」
震えそうになるのを必死にこらえて。ずっと喉に張り付いて出てこなかった言葉を絞り出す
言った。言ってしまった。これでもう、前までと同じ関係には戻れない
私はぎゅっと目を閉じて、先輩からの返事を待つ
心臓の音がうるさい。バクバクと鳴り続けていつか破裂してしまいそうなぐらいだ
そしてわずかな間のあと、先輩の息を呑むような音がして。それから――――――
「……すまん。お前とは付き合えない」
…うん。そう、だよね。わかってた。先輩はきっと、断るんだろうなって
わかってたけど、やっぱりちょっと、きついや
「……ア、アハハー。ダメですか。そうですよね。先輩、私のこと別

に、そういう好きって感じじゃ、なかったですもんね」
「…なあ、俺は」
「ごめんなさい。先、帰りますね。ここまで送ってくれて、ありがとうございました」
私は後ろで発車音が鳴り響く電車に駆け込む
先輩が私のことを呼んでいた気がするが振り返らなかった。電車の扉が閉まり、ゆっくりと加速していく
扉に寄り掛かり背後に流れていく景色を私はただ、ぼうっと眺めていた
窓には私の顔が反射してて、そこには外の雨でついた水滴がたくさんあって
まるで私が泣いているみたいに頬のあたりから流れ落ちていく
ふと、これは本当に私が泣いているんじゃないかと思って手で頬を触ってみる
でもやっぱり指先が濡れることはなくて、相変わらず窓に映る私だけが泣いていた

これはきっと、私の心を映しているんだろうな。確証はない。でも、そんな気がした

結局あの日は雨に濡れながら家まで帰った
いっそのこと風邪でもひかないかと思ってあまり体を温めたりせずに寝たけど、残念なことに風邪にはならなかった
でも先輩ならどこかから私が風邪ひいたこと聞きつけて、家にお見舞いとかに来そうだったからある意味よかったのかもしれない

…いや、告白を断った女子にそこまでしないですよね普通。一瞬先輩ならやりそうと思ったけど、流石に先輩にも気まずいって感情はあるんだからないと思う
先輩に会うかもしれないからホントは大学にも行きたくはなかったけど
今日の授業はあまり休みたくはないものだったから仕方なくいつもより早めに家を出ることにした
三十分も早く出れば、先輩と出くわすこともないでしょうし、後は会わないように気を付けて過ごせばいいですかね
そう思いながら電車に揺られ、駅で大学の近くに止まるバスに乗り込む
ここでたまに先輩と同じだったりすることがあって、いつもは少し期待していたんだけど。今日ばかりは来ないことを少し願ってしまった
幸い先輩が乗っくる、なんてことはなく。顔見知りが数人いる程度だった
そのことに胸をなでおろし、すぐに大学で先輩に会わないようにするルートを考え始めた

今日の授業をすべて終えた私は、固まった体をほぐす為に少し伸びをする
結局先輩とは会うどころか姿を見かけることすらなかった
しかし考えてみればこれは当たり前のことだった。先輩と私は学年が一つ違うのだ
必然的に取る授業も異なるから行動範囲も違ってくるわけで
「…私、どれだけ先輩に会いたかったんですか」
つい自嘲気味の笑みがでてしまう
先輩から距離を取ろうとして初めて、どれだけ先輩と近くあろうとしたかを知るなんて
何とも言えない気分のまま私は講義室を後にする

そして出口に向かおうと曲がり角を曲がったところで、一人の男性が壁にもたれかかってスマホを見ているのに気づく
その男性は私に気づくとスマホをしまってこちらに歩いてくる
そのまま、まるで何もなかったかのように普段通りに話しかけてくる
「まったく。探したぞ、お前いつもは呼ばなくても出てくるのに今日に限って来ないから。風邪でもひいたのかと心配したんだぞ」
そう声をかけてくる人は、昨日私が告白した相手で、でもそんな事無かったかのようにいつも通りで

……ああ、そっか。先輩にとっては私からの告白なんて大したことじゃなかったんだろうな
気にも留めない、些細な出来事として先輩の記憶には刻まれたんだろうな
でも先輩。先輩にとってあれは些細な出来事だったのかもしれないですけど
私にとってはすごく大事で、意味を持つものだったんですよ？
それなのに、そんなのって――――――あんまりじゃないですか
「おい、大丈夫か？　やっぱり風邪でも」
「触らないでください」
私は伸ばされた手を少々乱暴に払いのける
そのことに先輩は驚いたような顔をしたけど。すぐに　すまんと言って手を引っ込めた
その顔に少しだけ胸が痛んだけど、すぐに意識の外に捨て去る
「…今朝はすみません。でも私のことはもう気にしなくていいですから」
「いや、急に何を」
「私も、先輩とはできるだけ会わないようにしますから。お互い、そのほうがいいですから」
食い気味に答えた私の言葉に先輩は少しムッとした表情を浮かべる

なんでそんな顔するんですか。先輩は私の告白も些細なことだって思ってしまうぐらい、私のこと興味なかったんですよね
なのになんで、そんな怒ったような顔するんですか
私だって言いたいことといっぱいあるのに。我慢してお互いのためを思って言ってるのに。どうしてそんな顔するんですか
「お互いってなんだよ」
「そのままの意味です。私も先輩も、一度距離をとったほうが」
「俺は、そんな風に思ってないぞ」
今度は先輩が私が言い切るよりも早く言葉をはさむ、その声には少し怒気が混じっているように感じた
なんでそんなに怒ってるんですか。怒るのは、フラれて、そのことを意識されてない私のはずなのに
先輩が怒る理由なんて無いじゃないですか
「…まあいい。そんなことより昨日のことで少し話が」
「そんなこと…？」
…今、先輩は、そんなことって言ったんですか？　どうして、そんなこと言えるんですか？
私がどんな思いであの言葉を口にしたのか、わからないんですか
あんなに頑張って、怖かったのに、それでも形にしたあの言葉を、出来事を、そんなこと…？
「おい、やっぱり今日のお前なんか変だぞ。やっぱりどこか悪いんじゃ」
「…ん…い…んて」
「？　なんだ？」
「先輩なんて…」
「大っ嫌いです…！」
私はそれだけ言うと先輩に背を向けて駆け出す
少し遅れて後ろから　おいっ、待てよ！　という声と足音が聞こえてくる

私は追いつかれないように必死に足を動かす
曲がり角をいくつも曲がって、階段を駆け上り、できるだけ先輩から離れようとする
でもやっぱり男の人のほうが足は速いし、体力的に私が敵うはずもなく
気づけば私は行き止まりの壁際に追い込まれてしまっていた
「はぁ…はぁ…やっと、捕まえたぞ…」
少し息の上がっている先輩は私を逃がさないように壁に手をついて逃げ道をふさぐ
私は先輩の視線から逃げるように顔を横に逸らす。それを見て先輩は少し呆れたように息を吐きだし
「ったく、今日のお前やっぱり変だぞ。急に意味のわからん事言い出すわ走って逃げるわ、ほんとにどうしたんだ」
「…そういう先輩こそ、なんで追いかけてきたんですか」
「そりゃ様子のおかしいやつがいきなり走って逃げだせば追いかけもするだろ」
当たり前だろうと言わんばかりの表情の先輩は　で、ほんとにどうしたんだ？　といつもと変わらない表情で私にそう聞いてくる
そのことがやっぱり腹立たしくて、さっきまで必死に我慢していた感情が抑えきれずに爆発してしまう
「…そんなの、決まってるじゃないですか！　先輩がまるで、昨日のことを無かったみたいにしようとしてるのが嫌だったんですよ！
確かに先輩にとっては大したことじゃなかったかもしれないです、気にするようなことじゃなかったかもしれないです、でも！　私にとっては凄く意味のあることだったんです！
怖かったですよ、きっと今の関係を壊してしまうって。でも、それでも勇気を出して告白したんです！　想いを形にしたんです！
それなのに先輩は、まるで何もなかったみたいに話しかけてきて。そのうえ『そんなこと』だなんて言って。そんなの、そんなのあんまりじゃないですか!!!」
ここまで言っても、先輩は何も言わない。何も言ってこない。まる

で私が言いたいことを全部言い切るのを待っているみたいに
その余裕ぶった表情がまた癪に触って、なら、もう全部言ってしまえって、そう思って
「そもそもなんで先輩が怒るんですか！　怒るのは私のほうですよ！　フラれて、その上告白まで無かったことにされて！
それでも気まずくならないように気を使って距離を取ろうとしたのに、それなのになんで先輩が怒るんですか！　おかしいじゃないですか！
先輩は私のこと好きじゃないんでしょう!?　告白だって本当は迷惑だったんでしょう!?　ならそうだって言ってくださいよ！
好きじゃないなら変に優しくなんてしないで！　私の告白を無かったことになんてしないで!!　私の想いを、馬鹿にしないで!!!」
最後の私の叫びは静まり返った無人のフロアに少し反響しながら消えていった
一気に話したせいで少し息苦しくて、口で呼吸をして少しでも空気を肺に入れようとしてしまう
私の声が途切れたフロアはいやに静かで、私の少し苦し気な呼吸音ばかりが耳に響く
先輩は何も言わない。ただどこか申し訳なさそうな顔で私のことを見ていた
そして私が落ち着いたころ合いを見計らって口を開く
「…まず、お前の気持ちを踏みにじったりして済まなかった。遅いと思うが、謝らしてくれ」
すまない、そう言って先輩は頭を下げる。それからゆっくりと頭を上げて。今度は真剣な顔をして
「だがこれだけは言わせてくれ。俺はけっしてお前の告白を無かったことになんてしないし、するつもりもない。そしてお前が告白してくれたことを迷惑だなんて少しも思ってない。これは嘘じゃない、俺の本心だ。信じてほしい」
いまさらそんなこと言われても、って感じだろうけどな　先輩はそういって目を伏せる

ホントにその通りだ、いまさらそんなこと言われたって、私だってなんて言えばいいのか、わからなくなってしまう
「…じゃあ先輩は、どうして何もなかったみたいに話しかけてきたりなんてしたんですか」
私の言葉に先輩は、少し話すのを渋るような表情をする
しかしここで何も言わないほうが状況を悪化させることに気づいたのか、ゆっくりと息を吐き、言葉を紡ぐ
「お前にはあまり話したくはなかったんだがな…。お前も俺が一人暮らしなのは知ってるだろ」
「ええ、でもそれがどうかしたんですか？」
「俺が一人暮らしなのはな、家が遠いからってわけじゃなくて…その、もう両親が死んでるからなんだ」
「えっ…」
そんな話は初めて聞いた。そのことに少し驚きつつも、いったいそれがどうこの話に繋がるのかわからず小首をかしげる
「両親が死んだのは俺がまだ小さいころでな、それからはお手伝いさんに育ててもらってたんだが。その人も俺が大学に入った時に亡くなって…
そういう経験があるからだろうな、その、自分に近しい人が離れていくのがどうしようもなく怖いんだよ」
少し困ったように笑いながらそういう先輩は、昔を思い出したからか寂しそうに見えた
「だから今朝もお前の姿が見えなくて、正直怖くなった。昨日の今日だからな、お前が離れていってしまうんじゃないかって。だからお前のことを探したし、会ったときは…情けない話だが少し安心したんだ。だからいつもと同じように振舞った。いつもと違うことをしたらお前まで変わってしまう気がしたから。　…まあ、結果的にはそれがお前を傷つけてしまったわけだが」
「だから、なんだ。これが俺のわがままだって自覚はある。お前には…残酷な言葉だってこともわかってるつもりだ。だけど言わせてく

れ
〝俺との繋がりを絶たないでくれないか。お前は、俺のそばにいてくれないか〟」
そう言う先輩の目は少し不安そうで、いつもの少し大人っぽい先輩はどこにもなくて、まるで子供みたいで
本気で私が離れていかないかを心配しているのが伝わってきて
でも
「……なんですか、それ。私のことフッておいて、離れないでほしい？
そばにいてほしい？
どれだけわがままなんですか、どれだけ残酷なことを要求してるか、わかってるんですか？」
「…わかってるさ。それでも、俺はお前にいてほしいんだ」
先輩はそう言うと、じっと私の目を見てくる
一度叶わなかった恋、それを私はまだ捨てられていないのに。そんな私がそばにいたら、また期待しちゃうじゃないですか
それで私はもう一度言うんです。『先輩が好きです』って
でも先輩は、もう一度告白した私に同じことを言うんでしょうね。
『お前とは付き合えない』って
わかってますよ。伊達に先輩のこと、好きじゃないんですからね
でも、そんな未来も変えられるかもしれないのなら…
「…私、また告白しちゃいますよ。先輩が私のこと好きだって、付き合うって言うまで」
「まあ、あんまりしつこいと困るが。それでお前が離れないなら安いもんかもしれないな」
先輩は少し呆れたような、いつも見せてくれる表情でそう言う
その顔を見るだけで落ち着いてしまって、胸がきゅってしてしまって
ああ、やっぱり私。先輩のこと好きなんだなぁ

「…わかりました。先輩がそこまで言うなら、そばにいてあげます」
私のその言葉に先輩は露骨に安心したような表情をして
それを見て私もついクスッと笑ってしまう
「それじゃあ、今後もよろしくってことでいいんだな？」
そう言うと先輩は手を差し出す。握手のために差し出されたその手を私は少し強めに握り返し――――――グイッと引っ張る
当然先輩は突然のことで体勢を崩して頭の位置が少し下がる
私は背伸びをして先輩の耳元に口を近づけ
「でも、先輩が私から離れられなくなっても知らないですからね…？」
そう小声で囁く。そのまま軽く先輩の頬にキスをしてから手を放してあげる
先輩のあっけにとられたような表情に私は満足気な笑みで
「じゃあ先輩、これからもよろしくお願いしますね♡」
昔の私を意識した声としぐさでそう返す
やっと頭が動き出した先輩は、やっぱり前みたいな渋い顔をしていたけど
その頬は少し赤くて。心なしか口元は少し緩んでて。
「ったく、どうしてこんなに似てるんだか…。まあせいぜいお前に依存しないように気を付けるさ」
「ふふっ。私の本気は凄いですよ？　覚悟しといてくださいね」
「お前はＲＰＧの敵キャラか。あとそう言うやつの本気は大概凄くない」
「ふ～んそんなこと言っていいんですか？　後悔しますからねなんなら今後悔させてあげますよ」
「っ！　おい、急に腕に抱きつくな。歩きにくいだろ」
「はい照れましたね！　先輩今照れましたよね!!」
「だーっ！　お前少しは自重しろ！」
「いやでーす先輩が離れるなって言ったんですもーん。私覚悟してくださいって言いました～」
「こっの…！　あれはそういう意味じゃなくて…」
そんないつもの。むしろいつもよりも距離が近くなったやり取り

をしながら私達は歩き出す
さっきまで喧嘩してたなんて周りが聞いてもわからないぐらいお互いの距離は近くて
傍から見れば恋仲に見えるんじゃないかってぐらいで
でも先輩はそれでもいいって言ったし。現に腕に抱きついている私のことを無理に剥そうとはしない
それなら私は遠慮なく先輩にアタックしてやるつもりです。それで私のこと絶対に好きになってもらって
先輩の方から、私に告白させるんです。それで告白された私は心からの笑顔でこう返すんです

『はい、喜んで』

終